

新たな航海に
旅立つ我ら

待ちうける虚無と挫折

帆を下せる岸边に着き

希望の朝陽を望むことはあるのか

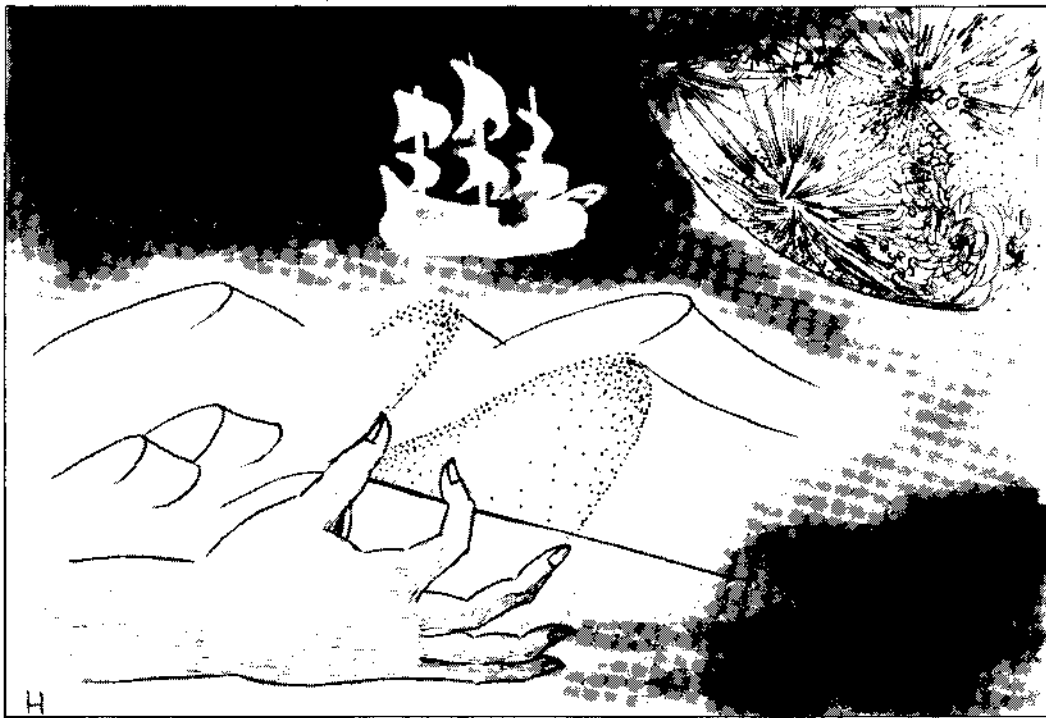
紺碧の空に

無限の喜びを得るときは来るのか

今 手にするこの「スプリング」に

たしかな指針を感じとって欲しい

今 はばたきの前に……



目次

巻頭言
写真

25号記念特集

(座談会) 70年代からのメッセージ..... 1

一九六〇年度自治会長インタビュー..... 7

昭和46年度の自治会活動..... 8

(主張特集)「現代」を考える..... 大川敬蔵先生

○青春について..... 布施田有里

○なんとなく、高踏派..... 尾場 太

○ A Simple desultory philippic..... 大友 安彦

○僕たちの将来は..... Short Interval

○生命の主張..... デカダンじゃなくてパープルノ

今自治会を考える

自治会意識アンケート..... 21

(座談会) 茨の道、自治の道..... 25

府立高専訪問記..... 29

School Life

行事紹介..... 31

○コーラス大会の思い出..... 松元佐和子

32

21

11

8



クラブ体験談

○友情(From 剣道部)	稲田 文司	33
○水泳部——花の存在	たぬき娘	34
○演劇バカの演劇	しなの秋弥	34
○変人クラブと呼ばれて(理研)	富士 英清	35

新任先生紹介

37
44

しいはく

○三つの人生	橋本 一雄校長先生	45
○五月八日のこと——稲川正義先生	石川 承紀先生	47
○腕白小僧とその父	近松 淳一先生	50
○自治会功労賞	平 正人先生	52
○ふと、振り返って想うこと	三宅 恵子先生	53

文芸

○河畔狂想	長井 道則	54
○ドラマティック・ショット	森田 吉公	55
○たまゆら	森永 明治	57
○New Yorking	小阪 淳	58
○感傷旅行	景山 将系	60
○The Blazing Red at Sundown	Dodo	62
○まこちゃんのパケツ	MAKO	64
○日本を出て認識したこと	片栗 粉	65
○翼あるものは	空蟬 処女	67

編集後記

68





“70年代からのメッセージ”
座談会風景



“府立高専訪問記”
校門から前庭を望む



高専小会議室にて
インタビュー風景

25号記念特集

座談会

70年代からのメッセージ

スプリングの歴史も四半世紀を迎えました。

各号が、それぞれの編集者には記念となりましたが、我々の二十五周年記念号の、その特別企画の一環として世代間の対話の機会をもとうということになりました。

題して、七〇年代からのメッセージ。

日頃お忙がしく各方面に於いて活躍されている本校の先輩方の中で、特に昔の自治会会長に集まって頂きました。

皆さんの在任されていたのは六〇年代の後半から七〇年代全般にかけて、丁度世の中の一つの流れの転機となった時代です。その中で確かに高校時代を生きていた御三方に各々の時期の思い出を語って頂き、我々の世代を代表する者としての元・現の両自治会会長との対談、という形になりました。

その日、十一月二四日は折しも文化系クラブ発表会、対談の会場となった校史編集室にも、階上から軽音楽部の演奏が聞こえていました。

「何か感じろよ」そう叫びながら編集者は本を出している訳ですが、この企画は単に懐古趣味的な発想に基くものや、あの時代へ

の高校生の回帰を訴えるものではありません。違った世代の、それぞれの持つ眼をしばらく借りてながめてみましょう。そこには新しい世界が広がるでしょうか。自分自身の姿を見るでしょうか。少し長いものになりましたが、読み込むことが出来れば一篇の主張を読んだのと同じくらいの後味が残ると信じます。

少し「からくち」の対談です。

出席者：一九六七年度 後期自治会会長 清水 正憲氏

一九七〇年度 後期自治会会長 紀本 岳志氏

一九七九年度 後期自治会会長 小松 修氏

元 自治会会長 山下 弘行君

現 自治会会長 菅 卓哉君

司会： スプリング編集委員会 寺内千佳子

依岡 伸洋

記録： 岡 亮治

編集顧問： 長谷川清一先生



—— 先ず、自己紹介をお願いします。

紀本 紀本と申します。昭和四五年度の前期の議長をやって、後期の会長をやりました。それから三年の時も学年代表をやりましたので大体二年間程自治会室に入り浸っていたという(笑)。今、ちょっとした会社を経営しています。

清水 私が一番年上とは知らなかった(笑)。四二年、丁度ベトナム戦争で、反戦気運が高まって―大学では全共闘―若者の反体制運動が一つのブームだった、そういう時の自治会です。特色的なのは、私の卒業年には東大の入試が学生運動の影響でなかった。その時に、自治会会長立候補求ム、という―誰も立候補がなくてね。

山下 今も同じですね(笑)。

清水 そのまま立候補者がなかったら―あの時の先生の表現では恐らく「自治会」という名前が失くなるらしくて。私はクラス会長をやって、その時全員招集されて―何とかしようと、そのまま推薦されました。それまで私も皆さんの一番頭を痛める無関心派だったんですが。それから三年の学年代表をしました。

小松 三人の中で一番若い小松と申します。昭和五四年の後期の会長で、五六年卒業です。今、大学生です。清水さんの時代は全体的な風潮として学生運動というものがあつたにも関わらず、自治会がつぶれかけたというのを聞いてちょっと意外でしたが―僕らの時代というのは、それこそ無関心派、三無主義といった時代の典型的な時期でありまして、僕の時もつぶれかけたんです。毎年つぶれかける(爆笑)。

二年の後期の会長だったんですけれども、後はクラス会長なんかで…。

学校封鎖！ 解ければ中から… 大手前生！



—— 学生運動たけなわの時代というと、僕達のイメージでは、デモ行進やって催涙ガス喰らったりする人が(笑)本部役員の中にもいそうな気がするのですが、当時の自治会の様子はどうでしたか？

清水 先ず、自治会の中で学生運動の窓口となつたのが社研(休部)。佐世保の米軍基地へ突入した人間が大手前の社研。君達は想像できないだろうけど、当時の全共闘のリーダークラスの人々は殆んど大手前の卒業生で―ところが活動というのは学校内には向かわず、外部へ外部へと。当時どこかの学校でよく流行つたのが封鎖とか。

紀本 封鎖があつたのは清水谷で僕らが二年の時。大手前はない。

—— 封鎖とはどんなものですか？

紀本 バリケードで校門を封鎖する訳。で、中で暮らしてる訳(爆笑)。晩になったらチキンラーメンとか(笑)買ってきて、ずうっと…

清水 外の学校で封鎖があつたら内で活動してるのが大手前生だったり―先生も頭痛かつたらうねえ。自治会には向いてこなかった。

—— でも文化祭では社研などは頑張ったでしょうね。

清水 文化祭ではベトナム戦争反対のデモ…といっても、シュプレヒコールしながら校内を行進する程度で。その時、白い鳩を作つたのを『あ、平和の鳩が燃える』とかいって燃やして―怒った先生が行列を阻止したというのがあつたけど、学校内部の組織的な動きにはならなくて、そういう意味では少数派過ぎたね。

—— では、今度は一番新しい小松さんの自治会の様子を…。

小松 とにかく何故なったかという、会長など誰でも出来ることを示したい気持ちがありまして。前期なら文化祭等、目標があるけど後期は予算組んだら終り。もちろん予算は大切ですけど、学校全体の意志を反映して行動する自治会の感じはなかったですね。

僕の責任は多いだろうけど学校全体の風潮だと思うし……かと言って無気力だ無気力だという割には個人はそんなことないですね。でも何故か、まとまってやるというのが大手前生は嫌いなようでして……それは恐らく、今の清水さんのお話でもそういうことじゃないでしょうかね。何か全体としてやる、という時には、皆自分で旗を振りたいのか誰かが旗を振ってでも知らんぷりをしている。

ボーカルは出来ても、 アンサンブルは出来 ない大手前生



小松 だからこそ誰でもいいんだ、というつもりで立候補しまして、立会演説会がありますでしょ？『嫌だったら不信任投票して下さいその代り貴方が立候補して下さい』（爆笑）そして得票率が相当落ち込みまして（笑）。そんな時代ですが、恐らく今に通じているんじゃないかと思うんですけど。その辺は現在の人達に伺いたいな。

菅 現在のことですけど……今までの色々な先輩方のことですから学生運動もあって、活気のある自治会だったのでは……と考えていたんですけど改めて聞きました、今と変わらないかとホッとしますが、（笑）。自治会としては高い望みを持って活動しようとしてますが、中心となるべき側の無関心とのギャップにヤキモキしているのが現状です。何とか打開したいと思うんですけども……

山下 前期と比べて仕事がないということ……今、何か改善計画で

すか？僕の時でも進めてたんですが、昔の資料を見ますとね、関心を高めようとか何年周期かできてきたようです。どれもうまくいなくて、その繰り返しなんですけど。

—— まとまってやるのが苦手という点についてはどうですか？

山下 確かにそういう点は無きにしも非ず、ですね。

小松 自分達のことですから突き離して言うてはいけないんですけど、前でボーカル歌いたい人とかはいっぱいいると思うんですけどいゆるアンサンブルは出来ない。多分それは中学校の時、割と目立つこととしてきた人が集まるからだと思うんです。そういう人ばかりが集まっちゃうと、誰か一人が目立つのはあまり良くない。

菅 牽制し合うみたいですね。

小松 そういう体質が僕は非常に嫌いだったんですけどね。

山下 とび抜けて指導力があるような人間だったら、みんなついてきてくれるかもしれませんが、均一な人間が集まっているから関心が集まらないのは仕方が無いという気がします。

赤頭巾ちゃん気をつけ て——

価値観の多様化



—— 今、大手前生の体質のようなものが話題になりましたけど、紀本さんの頃はどうか？

紀本 先程の大手前生の体質も、僕らの時代から特色的に出ましたね。価値観が多様化してきて皆が一つのことをやらなくなってきた。皆が色々な興味を持つし、色々な趣味を持っている、庄司薫の「赤頭巾ちゃん気をつけて」という本の中にあるように、学生運動してる奴もいれば全然関係なしにナンパしている奴もいる。その間に入

った者の心理を彼は上手く書いたなと思うんですけど。そういう意味で色んな価値観が、わっ、と出てきたというのが僕らの時代で、一年下になると更に雑多になったけれども僕は面白くないこと、興味の無いことはやらなかった。自治会活動は硬派の方で、我々自身で何でもやろうとするのだけれど、そういう訳で僕らの時代には誰も賛同してくれなくて(笑)。バンドやってる人とか社会活動やってる人とかといった分け方の中の一派が自治会をやっていた。

高校生の質は変わったかー 議論ということ、



紀本 まあ我々の時は社会的な背景があって、大学がかなり騒いでおったと。大学で騒いでいたのは社会科学系なところを見直そうという動きだったんだけど、それが高校に移ってきたのが僕が後期会長をしていた、七〇年安保がまさに話題に上ってきた時だった。実際、そういった先輩が末端、つまり学生運動の流れの末端にいた訳です。その底流となったのが、一つの解放幻想かも知れないけど、もう少し自分達の管理の下に何か出来ないかということでした。我々が受身であっていいのか、もっと能動的な挑戦的な立場に移るべきだという訳で、先ずクラブの顧問制を廃止しようという運動をしました。僕は議長と会長とをやりましたから、毎週、昼休みに会議があるんですね。だもんで、五・六時限目はかなりの時間授業がなかった。顧問制について議論する。安保の勉強会をする。公開討論会なんかもやらされたしね(笑)。七〇年安保の御堂筋デモを自治会がやれ(笑)とか、そんな話の一部では出ますし。一体自分にとって勉強は何かとか、面白くないことは果たしてやるべきなのかとか、

大学受験とか：みんな諦らめてやるんですけど(爆笑)。その前に何を高校時代に自分はやるべきか、やはりやりたいことはやろうという動きがあったんです。今から見れば幼稚な議論だったと思いますが、とにかく時間をかけて議論した。清水さんはどうでした？

清水 確かに私らの卒業する時がピークに差し掛かる頃で、七〇年沖縄変遷、安保、浅間山荘事件、あの一連のあと鎮まっていくなだけれども、その二年間で高校は大分違ったやろね、環境は。私らも色んな議論をよくした。その議論もかなりラディカルであったね。根本的な、一つ一つに答え切れるような問題ではなかったんだけれどね。判と皆が色んなことを考えていたんじゃないかな。丁度私の一年の頃自殺者が出てね。一年九組の子だったけど。自殺のこと、とっても考えたねえ。人生の話とか、宗教的な話とか。やっぱり問いがラディカルなかねえ。

小松 自殺者は僕らの時にも出ましたなあ。ときどき出るんとちゃいますか？

山下 伝統かなあ…

—— みなさんはよく議論されてきて：僕らの年頃は議論したりするの好きなんですけど：その時は答えらしいものは見つかりましたか？恐ろしく愚問ですけど…。

紀本 問題はそれだと思う。答えを出すために議論するのじゃない。答えが出たところで：例えば安保賛成・反対と言ったところで、それでは一体何をするのかと言えはその時、何も出来ない訳ですね。しかし何故そういう風になっているのかというプロセスを納得しない限り、我々としても納得いかんで、というような話ですね。例えば、何故クラブに顧問を付けなければならないか？クラブとは一体

何なのか、先生と生徒とは何なのか。そうすると学校基本法か何かの話になって、教育基本法は間違ってるんじゃないか(笑)とかね。そういうのがうまく結びつくと、「よし、学校を封鎖しよう!」。一旦、行動に出ないといけないんじゃないかと。大手前とは、先刻の価値観多様化が一番先行していた学校やから、残念ながらという効を奏してかは知りませんが、大手前ではそういう行動は出ませんでした。まあ、結果を話するんじゃないかと。いつも結果で行き詰まるんですけど何故か、何故かという揺り戻しみたいな、先程清水さんがおっしゃったように、根本原理からものとを考えるといかなければいけないじゃないかという話だったんです。

小松 そこが僕の世代—今の彼らの世代と繋がってるんでしょうけれど—との大きな違いだと思っんですね。個人的には議論したりするのが好きな人間も非常に多いと思います。しかし、今の世代というのは直ぐに答えが欲しいという所があるんですね。ですから議論といっても、意味が無ければしないというのがあるような気がするの僕だけの感想なのかなあ。

—僕達の世代のことですがどう思います?

山下 まあ確かにこの頃の高校生はあまり議論せえへんというのはよく言われますけど。

—でも議論というのは一種の自己陶醉の作業でしょう? 熱くなるのを恥ずかしいとか、そういったものを冷ややかに眺める風潮もありますでしょう?

小松 それはあつたでしょうねえ。

岡 しても無駄やとか?

長谷川 何故議論したら無駄なの?

岡 結論の出そうにないことを見越してしまつとか。

小松 話が突拍子もない所へ飛ぶかも知れませんが、我々の世代とというのがいわゆる共通一次世代で、共通一次というのは答が○であればよくて。その辺にも起因する部分があるんじゃないかと、チラと思うんですが。答えを求める学校教育そのものが、だんだん答えが無いと安心出来ない気持ちを生むことが多いんじゃないかという気がして。あの要するに数学やって、解けなければ後ろの答え見るでしょ? あれなんです(笑)。解答を捨ててしまつても考えるかで数学解けるかは決まる訳でしょう—それでもパツと見てしまつてしまう?—それが何となく早過ぎるんじゃないかと思うんですけど。解答がない問題は端から解かないといった風潮があるのではと思います。問題集選ぶ時、解答の分厚いのを選ぶでしょう?

菅 答えを一つに決めて欲しいという気持ちがありますね。あまりおかしいな答えは出したくないから、個人としての哲学的な考えは自分の中だけで完成させておいて、一つの穏当な答えに従つていれば何となく済むんじゃないかと。

紀本 中庸思想という奴やね。九〇パーセント以上が中流階級やという考え(笑)、それが今かなりのウェイトを占めていると思うねえ。しかし自然科学というのは異常値やないといかんのやからねえ。もちろん社会科学でも新しい思想というのはアウトライヤー(編者注—部外者)やしねえ。今までに無い話だから。それがしかし、君らと僕らの時と授業内容が違うことではないやろうしね。

清水 本当に今の大学生見てて違うなあ、と思うのはよくありますね。我々の時も突っ込んだ議論をし切れなくても徹夜するというのは平気でやったからね。泊まりがけで(笑)。

——友達なんかと修学旅行でやってましたが。話題はともかく。

山下 修学旅行のは、あれは遊んでやっているから(笑)。

紀本 修学旅行はひどかったですよ。四日間で三時間しか寝てなかったから(笑)。そりゃ絶望的でしたな、あの議論だけは。

長谷川 今の高校生には政治的な部分や勉強はどうなのか。先刻の岡君のように言っても仕方のない事になるのか。自分で暗い所で独りになって考えるのか。そういう事を人に話すことはあるのか。

菅 話すことはありませんね。勉強のことは、成績の悪い時位しか考えませんから。体のいい自分への理由づけというか、逃げ腰みたいで嫌なんです。それなら始めから考えないでおうと。

要は要領なのか？



紀本 僕個人としては、要領かまして問題集やった方がいいなと思った口ですが、何故って考えるのが好きやったから議論はよくやった方ですよ。ところである意味で共通一次は要領やないんですか。

小松 ええ、要領です。けど要領かまし過ぎてあの課目はとってないからと言って授業聞かなかったら個人はそれでいいけど全体に対してそれでいいのかどうか。

紀本 でも要領で済ませる部分はそれで、本職は他でやるというのは出来ないかなあ。

小松 その本職というか、熱中出来るものも最近では失ってないでしょうか。

紀本 でも大学に入ってしまうと、途端に要領なんて役に立ちませんよ。社会だって矛盾ばっかしだし。それが、京人やったら点が足

りる所でどこでもなんて決め方をする。数学なんか高校で良くても大学に入ったら如何に自分が出来ないか思い知らされますよ(笑)。

そのギャップが一番小さいのが医学部かと思っただんですが、医学の世界も大学出ると一変しますよ。人間が相手になりますから。上に上がった途端、要領では済まされない社会になってしまうのが、大学入試で一線を引いてしまうと、特にこういったエリート諸君が集まっているような高校では浸透してない気がしますね。

清水 私は工学部だったけど、余程の専門職でもない限り高校や大学での知識は実務役に立つことは少ないけど、全く無駄であったかと言うとそうじゃないな。基礎的な知識は色んな方向へ向かう上での基本になるから。大学入試のために要領かましてやるのも、それも良しや。しかしそれなりに一生懸命にやるように。損はない。

——本当に長い対談になってしまっ、お忙がしい中、本当に有難うございました。最後に「自治会の会長になって良かったですか。清水 無理矢理ならされたようなものだったけど高校時代が楽しくなった。何か自治会活動をやれば高校生活に得るものがあるんじゃないかな。

小松 今日、この席に呼ばれたことや、大手前高校を母校として捉えることが出来たことがそう。というのは初めに言ったように、大手前生に嫌悪感があったから。それだけだったらさみしかったらうね。

紀本 化学をやっているけど、今のものの考え方のルーツが高校に行き着く。良きにつけ悪きにつけ、一つの人生の中での、エポックメイキングな出来事だったと思う。

60年度自治会長インタビュー

今から二三年前、つまり一九六〇年度の自治会会長をおつとめになった堀内孝修氏にその当時の様子を少し聞かせて頂きました。堀内氏は、二年の時自治会長に立候補され、学校行事の運営にも、力を入られ、現在は、九州福岡県に住んでおられます。では、さっそくインタビューのようを……。

Q 1. 自治会活動と、その当時の社会の動きは？

A 社会の一番大きかった動きは、やっぱり安保闘争ですね、日本とアメリカが戦後結んだ安保条約反対の運動が、大阪城で行なわれたりもしていた。だから、自治会活動を考える時は、安保闘争が切り離し難いものだったよ。

Q 2. 自治会への関心と役員選出の仕方は？

A みんな（僕も含めて）たいへん自治会に関心があったし、信頼の仕方も大きかったよ。役員選出の方は、執行部とクラス役員の改選が密接なつながりを持っていたから、みんなのんびりと見ていられるようなものじゃなかったよ。

Q 3. 自治会へ入った理由は？

A 自治会というよりは、執行部に入っただけ、やはり、小学校の児童会、中学の生徒会を見てきて、社会情勢とか、みんなの意見をまとめたり、学校をよりよいものにしたいかと思って、立候補しました。まあ、自治会というものは、大手前に入れば、自然と入るものだし、大手前生であって自治会会員でないということは

ありえないからね。

Q 4. 自治会会長としての思い出はどんなものがありますか？

A うーん、会長として大勢の意見を代表して、自分は仕事が出来たのかということが大きな悩みだったことだね。歴代の会長さん達は、東大に入るのが前提条件だったし、なおかつ仕事も出来るということもだったんだ。

Q 5. 生徒総会についてはどうでしたか？

A ひんぱんに行なわれていたし、みんなの関心は、ものすごく高かったよ。とにかく、総会らしい総会だった。

Q 6. 行事は、どんなものがありましたか？

A 自治会祭というものが、六月に、文化祭が、九月、これがメイン行事だった。特に自治会祭が、国民会館で行なわれ、第二部が大阪城でファイヤーストームしたりね。おもしろかったよ。

Q 7. テストは年間を通してどんなものがありましたか？

A もうテストばかりで、覚えてないね。でも、実力テストは順位が職員室前にはられたりしたからよく覚えてるけど、七〇点取れたら凄いもんだね。平均が三〇くらいだったからね。昔と今では、自治会への関心が、極度に低下してしまったようです。是非とも、自治会の関心を高める為に現状を今一度考え直し、これからの自治会を少しでも、改善していきたいものです。

（御協力ありがとうございました。）



昭和四十六年度の自治会活動

大川 敬蔵 先生

俗に「十年ひと昔」といいますが、十余年前の自治会活動について、なんの資料もなしに書こうというのですから、なにかと独断・誤解もあるかと思いますが、昭和四十六年度自治会顧問のメモワールに、しばし耳を傾けていただきます。

では、十三年前の本校の自治会活動は、どのような状況にあったでしょうか。当時の全国の大学・高校では、どのような状況にあったでしょうか。当時の全国の大学・高校では、二年ほど前から吹きあれた「学園紛争」の突風が、ようやく静まってきたところでしたが、本校の生徒諸君の自治会活動への関心は、まだまだ根強いものがありました。たとえば生徒総会、代表会議での質問は活発であり、その一つ一つは鋭く、本部役員（四役と常任委員長）は、前日遅くまでのこり、討論をかさねたものです。

しかし、苦しいなかで、楽しい思い出としてのこっていることは、次々とおこなわれる行事の準備のため、連日遅くまでのこって検討し、具体化していったことでしょう。いま二年五組のH・Rになっている四〇一教室が本部室で、毎日のように集まり、ワイワイガヤガヤ話したものです。

とくに前期に行事が集中し、前期執行部はその消化におわれたともいえますが、その主なものをあげると、自治会予算の編成、自治会祭（六月）、大手前・北野交歓試合（以下、北野交歓と略）（八月）、体育大会（九月）、文化祭（十月）でした。このなかで、自

治会祭、北野交歓が廃止されて七年程になりますから、在校生諸君は、当然知らないわけです。紙数に限りがありますので、二・三の行事にしばって、思い出を記してみよう。

六月上旬の土曜の放課後、非公開でおこなわれた自治会祭は、大手前生が大いに楽しみにしていた行事の一つでした。四月下旬に成立した本部がまずとりかかったのは、自治会予算の編成でしたが、これと平行して、自治会祭の準備をしたと思います。わが本部が手がけたことは、「自治会祭とはどのようなものか」、をとくに一年生のH・Rで説明会をしたことでしょう（この方式は、文化祭でも踏襲されたと思います）。自治会祭は、「お化け屋敷」、「金魚すくい」など、いわゆる「お遊び」風のもののがほとんどで、天下の大手前生らしい機知のひらめきを感じさせるものがあつたのですが、私の初めての卒直な印象は、「天下の大手前生が、こんな幼稚なことをしているのか」、という驚きでした。（考えてみると、高邁なる哲学・思想を論じたエリートの旧制高校生も、寮祭などで大いにハメをはずしたのと、相通ずるものがあつたのでしょうか）。

とにかく当日は四時ごろの閉会まで、生徒諸君は熱中していたといえましょう。

自治会祭がおわるとすぐに取組んだのが、北野交歓でした。これは戦後の教育改革と深いかわりがあります。昭和二十二年ごろから、教育制度の民主化がおこなわれ、その一環として、新制高校の設置、学区制・男女共学が実施されました。大阪では、たとえば大手前高女と北野中学間で、職員・生徒の一部が交流し、男女共学が実現したのです。生徒は三年間で卒業していったものの、教師はかつての同僚が、多数両校にのこっているのですから、全校的規模で

の交歓試合をしよう、ということになり、相互に約半数の教員・生徒がでかけて試合をし、さらに一部のクラブが練習試合をしていました。

さきに述べたように、昭和四十六年ごろは、いまだ学園紛争の余波がのこっており、北野では、本部役員が選出されておらず、あまり乗り気ではなかったのですが、本校自治会は継続を強く希望し、当時の本校の保体部長の綿谷先生（北野交歓の創始者の一人ともいわれている）と伏見先生のご尽力で、なんとか実施にこぎつけました。プログラムの編成（バレーボールの試合）、地下鉄・阪急の切符の配布など、日時が迫っておりましたから、準備は大変でしたが体育科の先生方のご協力をえて、本部の諸君はよくやりとげたのです。

この北野交歓の意義は、滅多なことでは他校を訪問することのない生徒（教員も）が、他校の同年輩の仲間と競技をし、話し合い、とにかく他校の空気を味わうことができたことでしょうか。また北野高校のどっしりとした重厚な校舎が、旧制中学校のそれらしく印象的でした。聞いたところによると、昭和初期の不況期に建築されたため、かえって立派なものになったとのことでした。

次に文化祭ですが、昭和四十年代の文化祭は、十月初旬の日・月曜の両日に公開制でおこなわれていましたが、考えてみると、第一日は全く不思議な一日でした。朝九時に開会式があるので、全員登校するのですが、一時間もすると、ほとんどの生徒は姿をけし、校内はシーンと静かになってしまふのです。その理由は、文化祭は文化系クラブの発表会が中心になっていましたから、一時間もするとほぼ見おわり、クラブ員以外の生徒は、校外へでてしまふのです。

公開制でしたが、外部からのお客さんも少なかったですね。自活会祭でかい間みられた十代後半の若者の素顔は、非公開とされ、他方文化祭では、天下の大手前生のとり澄ましたよそ行きの顔が、公開されていたといえましょうか。そのための不人気だったのでしょうか。

このように昼間は閑古鳥がなくなかと思われるほどですが、三時の閉会のところから急にさわがしくなってくるのです。それは第二部の「ファイア」に参加するため、文字通り忽然と湧きでてくるように、校内に生徒があふれてくるためで、奇妙な感じがしたものです。

このような大手前の文化祭の現状に、私は疑問を感じていたのですが、それはある府立高校の文化祭を参観し、その印象がきわめて鮮烈であったため、なおのこと強かったのでしょうか。

私は自治会役員と折りにふれて、文化祭の持ち方を話しあっておりましたが、本部役員諸君の賛成をえて、新しい文化祭を創ろう、ということになったのです。このようなことが可能だったのも、この年の学芸部長の近松先生と桑原先生はじめ、担任の先生方のご協力があつたからでしょう。

では、これまでの文化祭とくらべ、どこが変つたのでしょうか。第一には、文化系クラブ中心の文化祭から、全員参加の文化祭へ、とその姿を変えたことでしょう。これまでの文化祭では、参加者は一部の文化系クラブ員にかぎられ、大部分の生徒は、ただ観客として、（別言すれば、傍観者として）、展示などをみるだけですから、当日の展示作品の製作・準備の苦しみ、痛みがわかりにくく、なんだこんなものか、ということになるのではないのでしょうか。全生徒がなんらかの形で積極的に参加することによって、一見してお粗末

に見える作品でも、展示物の背後にいる製作者の苦悩と努力のあとを理解できるのではないかと考えたのです。全員が参加することによって、はじめて仲間の作品を謙虚に観賞できるのではないでしょうか。全員参加という点では、私が参観した府立高校では、運動系クラブも展示に参加していました。

第二には、自治会祭と明確に違うものにするためにはどうしたらよいか、ということでした。自治会祭の二番せんじであってはいけないということ、本部では、文化祭とはどうあるべきか、そもそも文化とはどういうことか、というところまでさかのぼって討論し、知恵をしまりました。文化祭についての本部案をつくり、代表会議でも検討をかさね、さらに全員に徹底をはかるため、本部役員が二名で班をつくり、昼休み（放課後か？）に手わけして、とくに一年生のH・Rを中心に説明にまわり、担任の先生方にも立ちあっていたのだと思います。自治会祭が非公開で、「お遊び」風であったとすれば、文化祭は公開にたえよう、またその名称にふさわしく、より文化的なものを、より質的に高いものを創りだそう、とよびかけました。さらにこの年より、文化祭統一テーマをきめ、「大手前高校―昨日・今日・明日」となったと記憶しています。

ではどの様な内容の文化祭が創りだされたのか、具体的内容については、十余年前のことでもあって、残念ながらほとんど記憶にありません。いささか手前みそになるかもしれませんが、例年になく大盛況であったことは確かでした。

とにかく、この年の本部はなんでも賑やかにするのがすきだということで、「お祭り執行部」ともいわれた程ですが、たとえば、儀式化した開会式のワクをやぶるべく、本部役員の扮する月光仮面が

突如あらわれ、旧体育館の窓ぎわを走りぬけ、くす玉をわたりしたのです。また初めて、文化祭記念のステッカーを発売し（これは二・三年続けられた）、二時間ぐらいで売切れたと思います。第二部の「ファイア」の圧巻（？）は、最後に照明も消して、キャンドルサーヴィスをしたことです。小さいロースクを全員に用意し、ヤケドをしたらいけないというので、根っこに一本つつアルミ箔をまくという気のつかいようです。これをバケツに入れてくばり、終るとまた全員から回収しました。とにかく、これこれのことをしようとなると、その実現にむかって全員の知恵を集めました。

第二日目の青少年会館での閉会式では、校長先生、近松先生にも壇上にあがっていただき、全員で校歌・自治会歌を合唱し、最後にクラッカーをならして盛りあげたと思います。

自治会顧問の私は、本部役員の一人として、彼らにアドバイスをし、彼らと共に行動したのですが、討論の過程でほとぼりでてくるアイデア、それを取捨選択し、実行可能となればその実現のために障害をとりぞいていく彼らの行動力・指導力の優秀さには、度々驚嘆させられました。

紙数の都合で、後期本部については省略いたしますが、学校は勉学の間であるわけですから、自治会の諸行事も学習の効果をあげるためのものであり、全員が協力しあって、たとえば文化祭を成功させ、それを契機として、学習の面でも全員が協力しあい助けあっている、という意欲をもつようになればと思うのです。

一九八五年一月十日

記念25号

張集
主特

「現代」を考える

青春について

二年九組 布施田 有里

二年生も半ばを過ぎると、予備校などからよく入会案内が届く。その中の広告文の一つ――

君の青春は××予備校にある。さあ、今すぐ入会。

――ぐっ……。私は絶句してしまった。『青春』が比較的軽く使われるようになったこの頃だが、いきなり予備校案内に『青春』を使うなんて、ちょっと悲しい。いくら時代がそうだからと言っても、『青春』の本分は見失いたくないから……。一体、『青春』って何だろう。

今の若者（私も含む）は一般的に言って賢いと思う。だからその分、人生の逆算が正確なようだ。将来はこうだから、大学はあしって、だから今はそれをする。というふう……。もちろん個人差はあって、鉄道に例えると、人生というレールを時刻表と睨み合わせながら、社会に向かって一直線ノという人もいれば、鈍行でぶらぶら好きなことをしながら進む人もいる。ただ共通していることは、どこかで列車に燃料を補給しなくてはいけないことだ。これが『青春』というものに深く関係すると思う。『青春』とは、そんな駅のひとつではなからうか。そして、きっと高校時代という路線にはたくさん駅があるのだと私は思う。その中には絶対に止まっていけない駅もあるし、人がいっぱい降りている駅もある。ひょっとしたら誰

もない駅もあるだろう。そんな中で人は自分の止まる『青春』の駅を探す。これを見つけ出すために人は随分悩むことになるに違いない。やっと駅に降りても、人の悩みは次々に生まれる。例えば自分の駅を素通りしていく列車の数に焦りを感じたり……。そして、そんな中で『体験』という名の燃料を積んでいくのだ。それが『青春』ではなからうか。

でもこの頃は止まらない人が多いみたいだ。昔から少食に慣れていた、物理でいう慣性の法則みたいに行ってしまうのか、それとも周囲にせかされて食べたい欲求を我慢して走るのか……。どちらにしろ必ず、そういう人には後でひずみが出て来そうで、私は怖い。シビアな社会にあわてて出ても、もう思いつ切り食べられないと思うから。それに今を大切にしたいと思うから……。

少し昔、何かの会社のキャッチフレーズに、
「時間がないんだ、青春は。」

っていうのがあった。『青春』によく当てはまっていて、すごくいいと思う。もちろん、その会社はこのフレーズを『青春』には時間がないから、限られた時間内にたくさん燃料を積み込むんだ。という意味をこめていたと思うが、これが今だったら、『青春』には時間がないから、早く共通一次に向かって勉強するんだ。なんて思う人が多いんじゃないだろうか。社会の傾向上、仕方ないと言えばそれまでだけ……。

でも時代で環境や雰囲気が変わっても若さは永遠に不変のはずだ。だからそんなに負けないで、高校生はやっぱり視野を広く持つてより良い『青春』の駅を見つけるべきだと思う。

なんとなく、高踏派

三年四組 尾場 太

宇宙について考えたこと、ありませんか。ええ、きっと誰でも一度はこう考えたことがあるはずでしょう——宇宙のまた外はどうなっているのだろうか、と。考えれば考えるほど気の遠くなるような「不思議」ですが、理論上「宇宙の果て」までの距離は求められるそうです。詳しくは二年の『地学』で習いますが、宇宙は今でも膨張していて、その膨張速度（後退速度と呼びます）が光速と等しくなる点（これは宇宙の地平線、と呼ばれています）までが約一五〇～二〇〇億光年。それ以前では光速より後退速度の方が大きくなるため光がいつまで経っても地球には届かないことになるのです。不思議だと思いませんか。

もう一つ、異次元、これも不可思議な存在です。周知の通り、一次元とは数学で言うなら「点」、二次元は「XY平面」、三次元はこれに「Z軸」を加えたものと言えましょう。私達は三次元の世界に住んでいます、XY平面のみの世界、二次元とははたして、どんな世界なのでしょう。これも本でやっと理解できたことですが。もし、XY平面に人がいたとしましょう。平面の中の世界ですから、「人」とはいっても劇画マンガ本に描かれたべったんこなものと想定して下さい。この平面に卵が一個、閉じた円の枠の内側にあったとします。さて、この二次元世界住民は円の枠を壊さないで卵を円外に取り出すことができるでしょうか。（Fig.1）——言うまでもなくこれは不可能です。このとき突然、二次元世界との接点が

一時的につながれたとしましょう。三次元とはZ軸の概念がありませんから、枠を壊さずに卵をひょいと上からつまんで出すことができますわけですね。（Fig.2）さあ、円の枠組みは壊れずに卵は外に出ました。二次元世界住民がこの光景を見たらどう思うでしょうか。大騒ぎですよ。きっと。ふっ、と卵が枠を壊さずに外に出たようにしか見えないのですから。Z軸の概念を持たないためです。鶏が先か卵が先かどころではなくって、枠が壊れて復元したのか、卵が透明人間ならぬ透明卵になったのか？——彼らはこの不可思議な現象を、神の力とまではいかなくとも何らかの力が働いたせいだ、と考えることでしょう。

では、四次元の世界とは。三次元のZ軸に新たな座標を加えるかわりに、ここでは時間に横道があるのだと考えられているそうです。そこではタイム・マシンが自由に使えます。時間に逆行することができのですから、老いずに済むことだってできます。まさしく「Wonder-Land」なのです。「時は誰にでも公平だ」の類の諺も通用しません。羨しくもある世界ですね。

悲しいかな、いま、私達は三次元の世界に属する、非・自由人であり、時間も永遠不変のものではなく刻々と、動いていきます。先土器時代から平安王朝期、そうして二度の大戦を経て現在。時間は停まらず、明日、来年、未来へと流れていきます。無論、私達も明日が何月何日、来年は西暦千九百何十年、未来は二十世紀うんぬんとは知っています。自分は、或は人類がその時に存在しているのかは否かはまた別問題となりますが。

されど、明日はどうなるか、私達は知りません。当たり前のことです。だが、明日をどうしようかを予期し、計画を立てることは

できますし、またその計画表に従って行動をも起こせるわけです。

「一年の計は元旦に在り」まさしくその言葉通りです。予期して行動した結果はうまくの中するし外れてしまうかも知れない。けれどもそれはそれでいいのです。中には、的中が続いて多大な成功をおさめている人だっているでしょう。これを神の技かと思う人もいるでしょうし、四次元世界のいたずらかも知れないと考える者、（それは例えば、この僕のように）もいるでしょう。おもしろいものです。逆に、不運にばかり見舞われている人だっていつかはひよんな事で好転することがあるように——高踏的視点から眺めると「おもしろい」に尽きます。高い所から眺めるとそう感じませんか、か。

未来を予期しようと努力し、未来がわかればなあと思ったりすることは、四次元世界へできるだけ近づこうと、することに似ていると思いませんか。努力の目標に達するとそこはもう三次元の世界になっていきます。されどその時点で新たな目標、四次元の世界を目指している——この繰り返しで人生を終えるのでしょうか。うさん臭い言い方となりましたが。

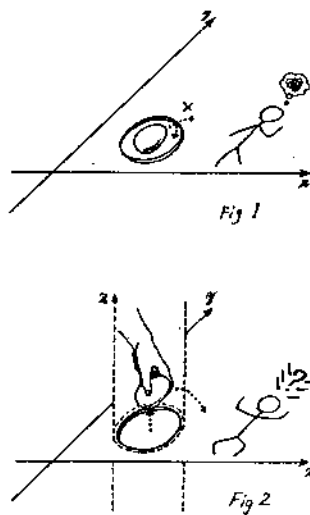
目標を達成したと同時に四次元世界が更に遠くへ離れ、決して捉えることがない、これがミソなのです。

高校へ入ってがっかりした人、ずい分と多いと思うのです。入学する前は心の中で（こんなことできるだろうな、あれもできるぞ、うんぬん）と期待していたのが、入学後一、三ヶ月ほどで（なーんだ、こんなものか）と失望してしまうということなんか、まさしく四次元世界に入ろうとはしたがそこは三次元世界だった——と同じではありませんか。

もし、目標達成とともに四次元世界での特権をも手に入れること

ができるとしたならば、きっと、そのまま踏みとどまり、過去の楽しかった思い出をとり出しては常に朦朧と、老いもせず、生きるのではないですか。

ええ、四次元世界の、未知への誘いは断ち難い。されど三次元世界は三次元のままでいい、こう考える理由は畢竟、以上のゆえんです。味わえないあめ玉は、とてもとても甘い、そういうことです。楽しく楽しく、生きたいと思うのです。まだまだ努力中ですが。



A Simple desultory philippic

三年九組 大友 安彦

(注1)

《And the people bow and pray to the neon

god they made——》

宗教は私達にゆるやかに作用します。宗教の源がそもそも、ラディカルな状況の変化、不安定さから、絶対的強者に護って貰いたいというところにあるのですから、そのゆるやかさは必然たるものです。それ故に、知らぬ間に下層思念に忍び込み、人間を体型の中へ組み込むのも容易い事で、普通、それは快楽へ導かれる過程と当

時者は信じています。そのゆるやかさと信者の盲信性が宗教の持つ絶大なる力、かつ危険性である、私は考えています。

唯一神である、なにも拘らず宗教の本質的なスピリッツは、唯物価値への盲目的崇拜という、極めてファッショ的なものであり、しかも前述のLSD的支配力も持っていますから、宗教という存在は第三者には危険極まり無い物の様に思えます。宗教がヤトラいならぬ対立を引き起こしているのは周知の事実ですし、この基本精神が変わらない限り(変わると宗教じゃなくなるのですが)宗教の悪用は将来に於て失くなる事は無いでしょう。そうすると、極論にはなりますが、宗教があらゆる支配体制の根源となつていとも言えます。宗教国家はかつて世界に君臨し、その多くは君主制封建社会として成立していました。こうした絶対的強者思考が、エスタブリッシュメントの神格化に痛裂に作用している事は、今更再筆すべき事でもないと思います。

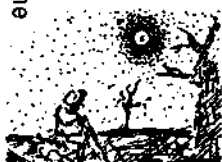
牧師がハモンドB-3を叩き、ジャズのビートに乗って讃美歌を歌うアメリカ南部の教会の陽的側面や、ブードウーの、マスコミ受けしそうなインサニティー^(注2)だけが、宗教を表しているものではないのです。尤も、本当に私が言いたいのは、宗教の危険性より、神仏の絶対性を傘に着たエスタブリッシュメントの事なのですが。

《体制の中のトイストリック》 (注3) システム

《注4》
God only knows God makes his plan

The information is unavailable to the

mortal man



私達は常にネイションの内部で生きています。個体より群衆の方が力があるのは物理的にも当然の事で、集団を造る事で個々の弱さを打ち消し、現在の人間社会が存在します。無政府主義が一般の支持を得られないのは、こうした人間の本能的集団による安堵感が破壊されると一般庶民に思われているからで、この点では過激派や、反体制集団も同様です。

しかし、懸安定^{ひまじ}すると内部腐敗を招き、外気に晒されるのを恐れ膿を出す事も出来ず、安定の名の元で自滅への道を外れる事も許されないと一面が有ります。実は、この一面の方が重要視すべき事で、本能的に集団を形成すればその個体差を利用しランク付けする事も、本能として当然なのです。社会主義政策が今一つ成功しない様に、この個体差を手玉に取り、人間の優越感を擲る事でその自己の能力は十二分に発揮されるのですが、この人間の性が哀しいかな、能力を残し自己を消滅させる事に繋がるのです。つまり簡単にダマされてしまうのです。

そして支配体制が出来上がります。ダマされた人間達はやがて彼らの絶対性を崇拜し、倫理という自隠して体制は矛盾を正当化し、一部のダマされない人間を倫理に反する不道德な輩と、反体制というレッテルを与えます。そして安定は自滅へ転り始めます。

現在の自分のステイタスを捨ててしまうには惜しいし、体制の下でも比較的自由に踊っていられます。ガードレールに沿って生きている限り、それがどんなコースであれ当面気にする事もなく、上手くいけばそれなりのゴールは用意されているかも知れません。しかし自分の踊るデイスコがどんなキラビヤカであっても、やがてシャッ



人は生きている限り病に伏しても一歩でも前進したい

ターを閉められ、目張りされ、偽善者のジーザスクライストのプロフィールを見る事なく、体制の掌で殺されていくのです。別に私は過激派を支援する気は無いですし、窒息するまで踊っていたいなら、それでも結構ですが。たとえ後に阿鼻叫喚が待っているように。

(注5)

《誰もが何処かに痛みに溢れた爆弾を隠している》

(注6)

アナクロなアベンゲールに対するアフォーリズムは常にアブノーマルな捉え方をされます。そして多くは体制のハンドメイドな倫理を通し、壁に書かれた落書きの如く無視されます。^(注7)しかし白ペンキで壁に「PAIX」と書いた少年の如く、そこには痛切な叫び声が表示されている事もあるのです。

(注8)

五感はどうなんに外的支配を受けようと、メデイティションだけは何時も自由です。皇国史観の教育を授かろうと、この自由さが完璧に思える体制の支配力に一点の穴を開ける事が出来て、今迄の事実まがいのリアリティーに疑問を感じる事が出来るなら、体制の嘘が見える筈です。見なければならぬのです。そして、全ての善悪を区別する倫理の一部が、そうした嘘に捏造されたものと言う事も分かると思います。

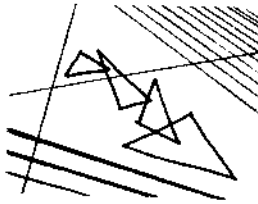
人間が本質的なリアリティーを、やたらリアルなファンタシーに毒される事なく正視するには、反社会的なイデオロギーが必要です。そしてそれを爆弾の様に腹の中に抱え込んでなくてはなりません。倫理的に反するところの倫理も、少なくとも思考の段階ではブチ壊して下さい。

エスタブリッシュメントは人を騙します。俗に言う愛国心が愛国

土心か愛国国家心か。国民を守る為の筈の国家が国民に保護を強要する。支配欲とサディズムと被害妄想の葛藤がノーブルファイトであるとする学生を戦場へ追いやり、合法的殺人と殺人の合法化を促す。マスコミの政府広報を、いかにも一般受けする様「倫理」的に飾る。権力が権利を奪う。「現状」を過大評価し、それに甘んじさせる。

そして何にしても反社会的イデオロギーが無いと、そうした「現実」に騙されてしまうのです。身近な物にも世界的傾向にも逆らうくらいの姿勢が必要なのだと思います。テンションのない世界では人間はバカになってしまいますから。

《で、現在を考えると》



「現代社会」の問題をやっていると、問題の本質に関して様々な疑問が浮かんで来ます。入試など、インヒューマンなエスタブリッシュメントのオースリティーが最も端的に表れる場ですから、「偏向」した思想に基づく設問を造るワケにいかない事も分かります。しかしそれはそれで、たかが11年(一いこハ8)猫被ってればいいんです。別に中核派しようという気は毛頭ありません。組織に毒されずこうした「孤立無援の爆弾」が万人に広まる事をひたすら「神」に祈って、私はメデイティションします。

(注1) Simon & Garfunkel "Sounds of Silence" より

(注2) insanity 狂気

(注3) 佐野元春 "Complication Shake Down" より

(注四) Paul Simon "Ship Slidin' away" より

(注五) 同三

(注六) ソラで意味の分かったアナタはスゴイ。

(注七) フランスの何とかと言う人の絵画、平和を、より

(注八) meditation 瞑想

(注九) 単なるUSA侵略文化に対する開き直り

僕たちの将来は

二年 Short Interval

文頭から無粋な話で恐縮だが、私達は或程度の学力を認められて本校へ入学し、そして恐らく私達の八割以上が進学希望するという現実を、まず頭に浮かべてほしい。これを、この小論の大前提としておく。恐らく否定できないだろうし、否定される様ならば、私がこんな主張等書いて憂うこともないからだ。ここは大手前高校だ。

はっきり言おう。大手前高校は衰退している。勉学面、生活面、精神面……あらゆる面で確実に。これは、統計的にも或程度出ていくはずのことだ。実際、私は、この事実を痛感する人を多数知っている。ここで、くどく言うのは、新入生諸君及び一部の鈍感な生徒の為だ。明らかな事実なのだ。

中には、「いや、他校がレベルアップしたから、そう思えるだけだ。」という反論もある。しかしだ。その場合、本校に通う生徒と同程度以上の学力を持つ生徒によって、本校は見限られるようにな

っている、と認めねばなるまい。本校を受験するには学力が足りぬと見なされた者が、他校の教育によって伸びたということも。言い換えれば、本校が、進歩の波から立ち遅れているのだ。

それでは、その原因を考えたい。その際、取りあえず、本校在籍間だけを視点とする。家庭や生活地域、小学校・中学校教育の問題について、今ここで私が叫んでも、どうにもならないからである。そういう問題については、最後に少しだけ触れるつもりである。

まず、私達自身はどうだろうか。どうも、大手前高生としての、いや、高校生としての自覚に欠けてはいまいか。と言っても、勉強だけをして、大人しく過ごせ、と言うのでは無い。私自身そんなことは無理だ。息抜きとして遊びは不可欠だし、この年代でないと出来ない体験や、他人との会話は、かえって勉学より大きな意味を持つものだ、と思う。しかし、そればかりと言うのも頂けぬ。

要ははじめだ。はじめがつかぬ、というのは、自分で自分を判っていないのだ。何故この学校へ通うのか？何故授業を受けるのか？考えてみて欲しい。あまりにも皆、主体性・自己意識が無さ過ぎる。

主体性の無さの象徴として、すぐ群れることを挙げる。休み時間集い、話す。群れ。を。それは只、情報交換をし、あらゆる傷をなめ合うだけのものでは無いか？除け者になることを恐れてしがみつく、他を封鎖したものではないか？それさえ本人が見分けていないのではないか、と案ず。良い友かどうか判然とせぬ団体を自ら造り、その化物に振り回されて自分を見失う。これでは、進路も何も拓けやしまい。考えが甘過ぎる。ドラけるばかりで無意義だ。



人生は朝露のごとし

自分の目的・希望を持ち、それに対してするべきことぐらいは、見分けて実行したいものだ。知能の発達した幼児から脱け出せノ

次に、先生方に対して意見を述べたい。(以下、私の独断だが)

最も痛切に感じることが、私達に興味を持たせ、期待を裏切らない授業をして頂きたい、ということだ。私達は貪欲かつ無知である。教科書を空間で再現しただけの授業には食いつかない。そして、基礎の段階で取り付きにくいと、無知なままズルズルと落ちこぼれる。更に、基礎概念から独学理解するというのは、他の教科の予・復習の手前、私達には困難だと、判って頂きたい。或る程度の学力、と言えど、私達には得手不得手がある。けれど何にせよ基礎概念を、興味を持たせて叩き込んで頂ければ、赤点など本来無い、と思うのは理想論だろうか？現在の時間数・制度では、そこまで望むのは無理かもしれないが、やはり、基礎を固め刺激を与え、段々と重要事項に取り組んで……そうでない社会や理科・数学の味気無さったらノ

こんなことは、下らない判り切ったことかもしれない。だが、もっと徹底されるべきだ。先生方は、かつての名声を……と思ひ、レベルの高い授業を目指しておられるのかもしれない。しかし、その為に、落ちこぼされ、を作り出して、授業の活気を失い、妨害されていく、とすれば非は明らかである。私自身の体験から言うのだ。

再度述べる。興味を私達に与えて頂きたい。基礎を必要十分に固めて刺激を与えて頂きたい。理解に伴うレベルアップをして頂きたい——つまりは、本校教師として自負と向上心を持って頂きたいのである。高度な技術に憧れるのではない。教育力を望むのだ。



余談だが、現在、私にとって尊敬できる「先生」方は少ない。きっちり教育理念・教育哲学を持っておられる方からは、私にも、その自負や向上心が察せられるのだ。そして……。いや、私の錯覚かも知れぬ。五年以上の先達から何も感じられぬ事も無からう……。三項目として、本校の制度について。どうも、生徒の甘えと制度の寛容さが悪循環を成していたり、制度が空回りしている場合があるように思われる。二、三例を挙げようか。有って無いが如き標準帽も然り。自転車通学禁止も然り。現状ではわざわざわしいだけだから、廃止か徹底かどうかするにせよ、生徒心得を改変した方が良くはないだろうか。生活指導部又は自治会の解釈を詳しく聞きたいとこそだ。

しかし、もっと深刻な問題に原級留置制——俗に言う「赤点で落第」——がある。或先生の御言葉から推察すると……まず私達が赤点を取る。すると、学校側(その見地は私にもよく判らぬ)が休面を気にし、落第者(自主退学を除く)を極力出さない、定期考査が、最低三〇点は取れる様なものになる。生徒は落第の心配も無いので、馬鹿になるばかりだ……という様な事態である。この推察は、そう的を外したものでない、と思う。となれば、元凶を決めつけられぬだけに、難しい問題だ。廃止どうかとは、うかつに言えぬ。

だが、どうにも出来ぬとは言え、私達生徒も、心の内に留めておかねばならぬ。制度をぬるま湯化して、浸かってみたくて、私達生徒の得にはならぬ。学力の平均レベルが下がって困るのは、大受験の為だけではない。各方面への興味と可能性を奪う故でもある。社会に出る為の土台として高い知識も持つに越した事はない。結局、制度に関して、私が判然と言えることは、「私達は自覚を

持たねばならない。」——これのみだ。常識と、人に流されぬ主体的自我を持つことは、何も大手前高生だけでなく、この年代の者は、誰も気付かねばならぬのだ。全ての社会制度に対して。

こうして考えてみると、本校の衰退とは、生徒の常識や主体性・自己意識といった自覚、先生方の「先生」としての（つまり人格も含めた教育者としての）自負と向上心、制度を作り守り拡げようとする様々な人の姿勢……この三点に掛かっている、と私は思う。決して他人事ではないのを見直して欲しい、その上で、私達は、学び、遊び、友を作り、読書し、有意義に過ごそうではないか。

さて、私がこの論を述べることができたのは、本校を対象としたからだ。実際は、人間の成長は、幼少生活において基盤ができ、ここには、テレビや偏食といったものから、系統の無い漢字学習や「ゆとり時間」という様なもので、多くの難題がある。これらについて考えたい向きには、私は「独学のすすめ」加藤秀俊（文春文庫）、「見える学力、見えない学力」岸本裕史（国民文庫）をすすめる。この文の参考とした本である。

生命の主張

三年 デカダンじゃなくてパープルノ

高一のいっちゃん初めの頃って、なんか、こう不安だったわけよ。中学の頃って一応「三学区でビリからヒトケタ」の学校（何が基準かなあ。）で、ある先生なんか一時間に「やかましいなあ。もうどんなもてないもならへんやないかあ。」って二十回はわめくわけ。それ

に出張してくる子はいたし、めちゃくちゃだったのね。（あらやだ、こんなこと思ってたのにイ。やはり人間の主観って相対的なものね。）僕ってそのころ硬派だったから、かまわず勉強してたのよ。でもなにか充実っていうか、完全自動詞的に「生きてる」ってか「死にたくない」って思ってた。僕って自我の強い方でいわゆる「ボンボン」だったけど、それでも非知っとか野性とかに憧れてたもん。金子正次、高倉健っとかタイプなのよ。でもね高校にいけば手取り早く自分の将来思ってる道に乗らないと現実に対応できないって思い込んだの、ヤクザにはどうしてもなれないもんね。まあ就職する子が結構いたからかもしれないけど、兎に角中学時代はドサクサしてたのオ。でしよう、するとね静かな授業ってどんなだろうって楽しみだったの、クラシックでも聴きに行かなきゃないじゃない、そういう状況って、やっやっやっ。

確かに静かだったね。しかしいざ静かになると不安になったのね。僕こんなとこ三年もいたら、ナンバになっちゃいそう。って。



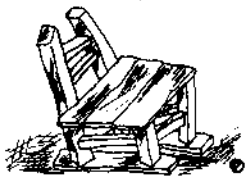
大手前高校って、たぶん暗いと思うのね。まず「窮屈」。校舎を出ても廊下って感じしない？。下向いて歩く子が多いの。視界が狭いのって絶対よくないね。そのせいかどうか、球技大会なんかで学年違いで当たるとやたらインケンになるのね。マラソン大会でもずっとセバレートコースみたいでボーと走ってると二周目の梅林の坂辺りで前をみるとぞっとするのね。スタートの時みたいにスシ詰めが続くのよ。まあマラソンというよりは中距離走だもんね。スタートが肝心です。また又は文化祭が落

ち着かないのです。会場が狭い上に予算は仕方ないにしても、六月なんかにはやるんだもん。そして極め付け（それ程でもないか。）は先生方のお説教とか励ましのお言葉とかが観念的形而上的な方に片寄ること。それを言わせる生徒が悪いのでしょうか、大手前出身の先生が多いことにも関係がありますかね。そしてその中心概念となっているのは「君たち（お前らとは決して違ってませんよ。）は能力があるはずなのに……」っていうやつ。はっきり言って『自閉と全能の幻想私の保存をめざす』ナルシズムをくすぐられるのね。我々を『唯我独尊の口唇リビドー期へ退行』させてくれるわけ。卒業生に工学部志望者が多いことと関係があるかもしれないね。僕なんか坂口安吾的無頼派だから初めてオリエンテーションかなにかで、大手前生の自覚についての話（そんなホンマにあったかなあ。）があったときなんか直感的に、

△世の中には文字を知らなくても、家族がなくても、所属感がなくとも生きている者がいる。中には我々の危険感、いや生の安定さえものとせず強固な思想、生活観を持っている者が少なからずいる。いわゆる「非知」な者も含めてだ。——ところがだ——

お前たちはたまたま「現実」のお気に召した小猫にすぎない。

You have no scars on your face——なのだ。つまり出来合いの言葉を拒否せずにすんだだけなのだ。まあ三年間はお前たちの私的幻想を保障してやる。心して「現実」に合う大人にならなさい。君たちには我が共同幻想に葛藤を感じない文化人になるべき「能力」があります。君たちの感覚器官は確かに「現実」を捉えています。もし「ずれて」くれれば



我々が治してあげます。我々は「正常」な標準をもっているんですから。（言葉というものはより「手垢」のついた方の意味を主流としますので、この文章は「アイロニー」を使った現実批判」と理解されがちでしょうけれど、それは間違いです。実際は直感があるコンセプトを使って翻訳しただけなのです。但し同感した人は私と気が合うでしょう。）

って聞かされたもんね。ちょっと大袈裟だけど精神分裂症的現代においては極端化も夢物語じゃ済まされないのよ。

僕ってときどき恐くなるのね。世界中の国々が集まって、理性的に相談なんかしたら日本が一番非難されるんじゃないかと。ピルグリム・ファーザーズのインディアン虐殺の正当化から始まるアメリカ合衆国の自由と民主主義の名における自己欺瞞にしてもソ連（ソ連ってよくわかんないけど、なにか主義にこだわってて外面を整えんとするあまり国民の不満を解消できないって感じ。不勉強ですねこにしても、非難されるべきだろうけど大局をみると起源的にも、みんなきれいな体じゃねえんだぜって感じで、よく考えてみると、下手に軍事力や経済力があって厄介で、そのくせ文化基盤がはつきりしない妄想的なアジアの極東の山勝ちな島国日本が一番発言力が弱いのではないか。いかなるものでしょう。（ちよっと軽薄かな？）ところが僕は一種新種（だと思ってる）のニヒリストでありまして、そんなことを考えていると、人間は所詮生命進化の過程における最大の失敗作で自然界を直接「現実」として生きることができずに幻想をもてあそぶ最低の動物だと決め込んでしまっただけで、現実にしっかと足がついている優秀な動植物の生活に目が移るのです。

（日高敏隆著『動物にとって社会とはなにか』等参照。）

こんなような視点からいくと筒井康隆の小説って「生命という着想」という感じがするんですが、いかがなものでしょう。

ところで核兵器において僕は、人間の自然への適応の仕方という観点からの現実感への問いが隠喩として考えられると思う。これまでの人間の歴史に明らかのように国家という概念では国民の私的幻想を包み切れなくなったとき（革命によって私的幻想の一部が共同幻想に昇格しても関係ない。国家そのものが問題。）たいてい戦争が

本書の乱入者―編集者記

α ……あれえ。自治会欄に自治会会長の原稿が無いじゃないノ
β ああ、そのことか。座談会で仰山喋ってもらったし、それに誰も読んでくれへんやろうって思ってたね。

α ……（絶句）前例が、無い。

γ 自治会の機関誌に宿主が不在って……よくないよ。

π えっ?! スプリングって自治会の機関誌だったっけ？ 俺は新入生の歓迎や卒業生の記念のための雑誌だと思っただけ。

β そうそう、機関誌って考えるのは無理やね。みんなが期待してるのは文芸とかやろうし、会務報告とかクラブ紹介だけじゃ読んでくれる子いないし……文芸や主張の一般投稿を重視するのも意義あることやと思うよ。

α じゃ、一頁でも自治会の頁があれば、他は何を書いてもいいの。

β うん、それだけの表現力のある人間がいればの話やけどな。

γ そうかなあ。確かに20号の編集後記なんか見ると、今やスプリングは自治会と特別繋がらないものになったとあるけれど、文化部って自治会の関係機関やろ？ これだけの仕事が出来るのはやっぱ

起ってきたのです。ところが核兵器を使った戦争ははっきり言って国家という概念との心中となります。国家とは何か。ここにおいて人類規模で問われるようになるのではないのでしょうか。村上龍の『海の向こうで戦争が始まる』『コインロッカーベイビーズ』を読んだから考えるようになったことです。最後に、

大手前高校でのありかたはすぐ世界にかかわるのだ。うっ 便派。

り自治会あったのことやと思うねん。だから文芸入れるのはいいけど、自治会の雑誌であるという本質から離れてしまうのはよくないと思うんやけど、どうやろ。

π 現在の自治会は身内でやってる自治同好会や、って意見が出てたんやけど、今年の編集部も一種同好会的な性質あったやろ。本部から一任された編集委員が、自由に自治会を取材して本を出すって考え方は出来ないかな。

β 編集委員が先走りしてしまうのも考えものやで。スプリングを創刊したのは一般会員の関心を自治会全体としてまとめたい、そんな目標があったらうけど、僕ら編集委員に大切なのは、スプリングとは何か、と真剣に考えて作ったかということやね。単なる募集原稿の交通整理に終わらなかつたか？ 大いに反省しないといかん。

（突然、ある先生が編集室に入ってくる。喜色満面……）

某 おうい、一年生の読書感想文が総理大臣賞をとったぞー。丁度いい機会やからスプリングに載せてくれ。

β（絶句）。…で、でも先生、これ以上ページ増やすにも予算が……。

α そうですよ、経費節約の為、グラフまで手書きしたのに（泣）。某 予算は俺がぶんどってくる。二ページあれば載せられるやろ。一同 ええっ?!（飛）スプリングって学校の機関誌なんですかあー。

今自治会を考える

意識アンケート

1. 現自治会役員を知っていますか。
☐ (イ) 名前も知っている
☐ (ロ) だいたいの見当はつく。
☐ (ハ) 知らない。
2. 自治会の役員は何人ですか。
☐ (一) 人
3. 自治会の意義を何と考えますか。
☐ (イ) 高校生活における自主的活動の場。
☐ (ロ) クラブ活動の一つである。
☐ (ハ) 学校と生徒との交渉機関
4. 自治会の存否についてどう考えますか。
☐ (イ) 無くてもよい。
☐ (ロ) 今のまま続けるべきである。
☐ (ハ) 改良しながら続けるべきである。
5. 自治会の執行部の仕事を知っていますか。具体的に書いて下さい。
☐ (一) わからない。
6. 自治会に信頼を持っていますか。
☐ (イ) 持っています。
7. 6で(イ)と答えた人は、それはなぜでしょうか。
☐ (ロ) ほぼ持っています。
☐ (ハ) 持っていない。
8. 生徒総会について現状をどう見ますか
☐ (イ) うまく行っている。
☐ (ロ) まあまあよい。
☐ (ハ) あまりよくない。
☐ (ニ) 全然だめ。
9. 8で(ハ)と答えた人は何を改良すべきだと思いますか。
☐ (一) 人
10. あなたは学校行事が自治会によって運営されていると思いますか。
☐ (イ) そう確信する。
☐ (ロ) だいたい思う。
☐ (ハ) あまり思わない。
☐ (ニ) 全く思わない。
11. 自治会と自分との関わりをどう思いますか。
☐ (イ) 自分は自治会の会員である。
☐ (ロ) 自分と関わりがあるかどうかわかりません。
☐ (ハ) 関係ありません。
12. 自治会室に來たことがありますか。
☐ (イ) はい。
☐ (ロ) いいえ。
13. 執行部に入りたいと思ったことがありますか。
☐ (イ) あります。
☐ (ロ) ありません。
14. もしあなたが会長になったら何をしたいですか。
☐ (一) 人
15. 自治会についてのイメージを……。
☐ (一) 人

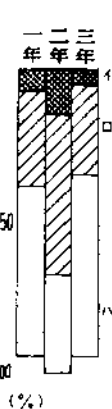
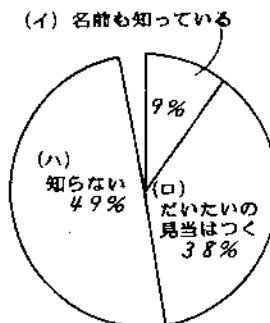
停滞、してるものといえは何を思う？
 経済？文学？君の成績？それとも自治会活動？…成程どれも大切なことばかり。だけど自治会って何だっけ？よく考えてみるとよく分からない。そんな時は思い出して下

さい。君も僕らも先輩もみーんな自治会会員他人のものではありません。一人では重すぎる伝統も万人の信頼あればこそ輝くものです。Right on、自治会。隔たりのないつきあい方を見つけて下さい。

昨年11月に以上のアンケートを行いました。結果は次ページ以降にあります。

。大手前生百十一名の解答結果です。
。100%未満のグラフは白紙解答を示します。棒グラフは学年ごとの内分けです。

1. 現自治会役員を知っていますか。

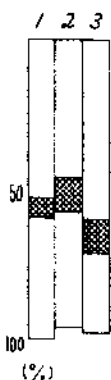
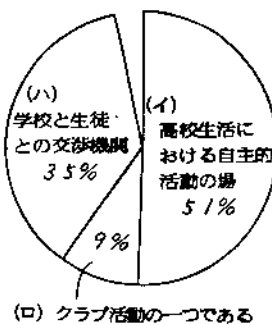


2. 自治会の役員は何人ですか。

会長・副会長・書記・会計の四名です。
ところが四人だけで仕事をこなすのは不可能なので、自治会本部には常任委員を含め五十二十名位の人達が集まっています。普段でもこうなのだから、文化祭前になると猫の手と人の手の区別ができなくなる程の忙しさ。君も手伝いに来ませんか？

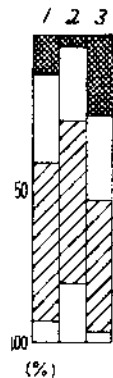
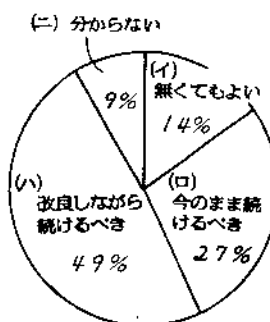
—とはある役員さんのお話です。
ちなみに正解者は十三名でした。

3. 自治会の意義を何と考えますか。



選択肢が少ないから無難な(イ)が増えたって感じですね。とは言っても突然聞かれたら僕だって答えられませんが……。

4. 自治会の存否についてどう考えますか。



5. 自治会の執行部の仕事を知っていますか。

「文化祭」「体育祭」など、「行事の企画と運営」という答えがトップ、以下—

「クラブ予算の決定」

「自治広報をつくる」

「スプリング」(これは文化部の仕事)

「クラブ連絡会を行う」

「生徒総会の司会」

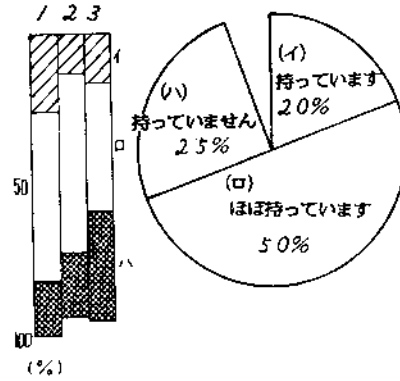
「全校朝礼の司会をする」

白紙解答数の割合は、一年生54%、二年生31%、三年生17%、と学年がすすむごとに減っています。

みなさんが入学された時に食堂前でバッチの販売をしていたお兄さんを覚えてますか？あのお兄さんも自治会役員なのです。友情の絵はがきも自治会が取り扱っていますし、聞けば聞くほど仕事が出てくるのですがどういわけか本部はいつもなごやか。不思議なところですよ。自治会は。



8. 自治会に信頼を持っていますか。



7. 6で「信頼を持っています」と答えた人はなぜですか。

理由を三つに大別してみました。

無関心派 36%

「知らない」

「何をしているか分らない」

「存在感がないから」

執行部に問題 43%

「たよりない」

「いいかげんそんな子が多そう」

「礼儀知らず」

「言ったことを完全にやったことがない」

「何もしてくれない」

「ワンパターンで進歩がない」
「本部でコーヒー飲んでるそうだから」

—— 学校側に問題 —— 18%

「教師の言いなりになってるから」

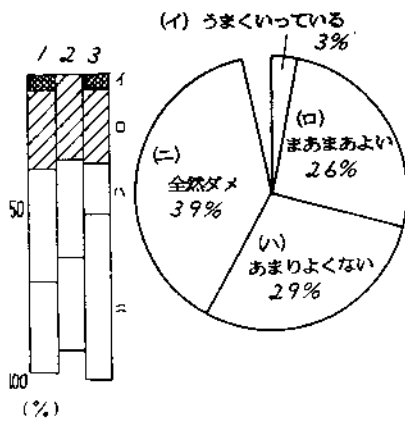
「先生の意見に押されて、生徒の意見が通らない」

「学校はすぐ自治会を裏切る」

・執行部に問題・の多くは、無関心派・

に入れるべきという意見もあったのですが、あえて別にしました。しかし信頼を持てない理由があまりにも曖昧で、身勝手な部分が多いことも確かです。

8. 生徒総会について現状をどう見ますか。



9. 8で「(ニ) 良くないダメ」と答えた人は何を改良すべきだと思いますか。

やはり「生徒がうるさすぎる」という意見が圧倒的でした。

「進行が下手」

「形式だけで内容がない」

「生徒の関心をひく努力をすべき」

「役員だけで進行しない」

「妥協せず静かにさせる」

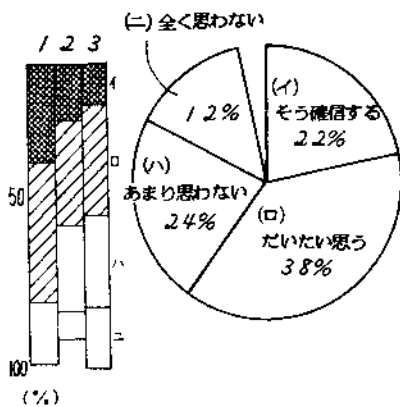
「改良できる状態をすぎている」

「総会は本当に必要なのか？」

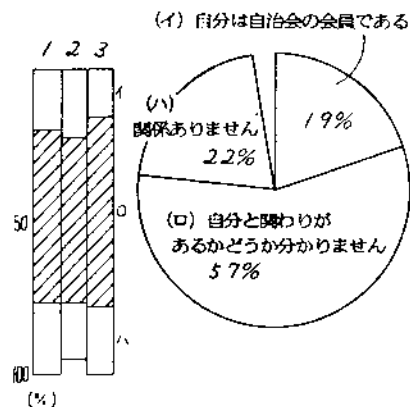
「プリントにして配ればそれだけで済む」

—— 十分な議論が必要だと思えます。

10 あなたは学校行事が自治会によって運営されていると思いますか。

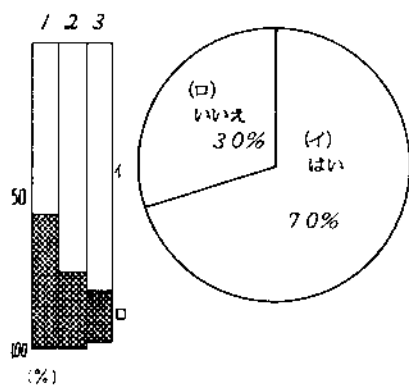


11 自治会と自分との関わり。



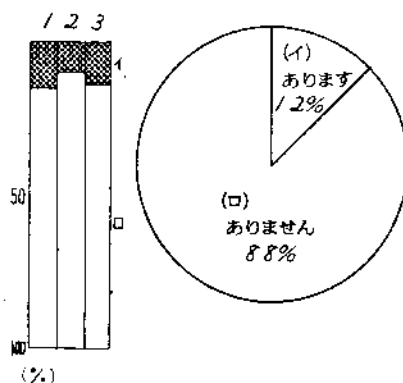
たったの19%？自治会費を払っている僕たちがこんなに無関心でよいのでしょうか。千七百円ですよ。千七百円ノ！

12 自治会室に来たことがありますか。



自治会本部室は金蘭会館の一階にあります。ガラス張りがイカスでしょ。えっ？ゴミ捨てに行く時通るから知ってるってノ！

13 執行部に入りたいと思ったことがありますか。



14 もしあなたが会長になったら何をしたいですか。

「文化祭を秋にする」「文化祭を二日間に」「女子サッカー大会を開く」「すもう大会」……など行事に関する意見が15名でトップ、
「自治会への関心UP」 (9名)
「自治会を廃止する」 (6名)
「生徒会に変える」

ないと思う」 (4名)
「自転車置き場をつくる」 (4名)
「自治会室のそうじ」 (3名)
「同好会をクラブに」 (2名)
「募金活動をする」 (2名)

他にも「生徒達のコミュニケーションの場をつくる」「自治会の威力を生徒に思い知らせる」等がありました。あなたならどんな大手前を夢見ますか？

15 自治会についてのイメージ

「暗い」 (25名)
「明るい、家庭的」 (10名)
「内輪だけの存在」 (10名)
「縁の下力持ち」 (12名)
「がんばっていると思う」
「自己満足、ナルシスト」
「近づきにくい」
「陰の存在」
「ストーブの周りに集まって雑談する」

良いイメージ、悪いイメージが極端に分かれました。かつては「自治会役員」京大と言われたのですが、さて現在は…ハハハ。



茨の道・自治の道

座談会



スプリングは自治会予算によって作られる雑誌ですが、当の自治会は今、存続の危機に脅かされています。大阪府の方針で予算の大幅削減を迫られ会計は壊滅寸前。ところが生徒の方は無関心なため、役員にかかる負担は多く、十分な活動ができなくなっています。

いったい無関心の原因はどこにあるのでしょうか？安定しきつた世の中に浸透した「価値観の多様化」のためでしょうか。いや自治会活動のアピール不足だと言う人もいます。また過去の伝統に甘んじている大手前生の悪弊の一つだと分析する人もいて、安易に答えは出ませんがその根源はとても深いものようです。

けれどどのような自治会の衰退を（ひいては大手前の衰退を）本気になって憂慮している人達はたくさんいます。意識アンケートをもとにしたこの座談会でも、熱っぽく語ってくれた役員達の意見は真剣なものでした。内容が込み入っているので分かりにくい部分があるかも知れませんが生徒全体の自治会を目指す心は変わりません。修学旅行の時ようやく出来上がったフォークダンスの大きな輪——僕達の忘れかけているものが、そこにあったような気がするのです。

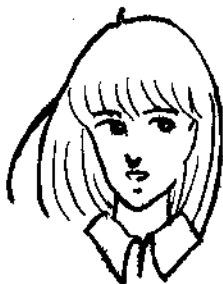
日時 昭和59年12月21日（金）

場所 自治会本部

出席者 前期常任委員

後期自治会役員

陸上部有志



INTRODUCTION

A 「アンケートの一番でね、役目を知らないっていうのは生徒総会に問題があるんじゃないかな。」

会長 「今の状態はたしかにひどいね。」

G 「騒がしいし、形式的だし……何とか改良しなきゃ。」

E 「総会なんてやめたらいいねん。あんなの無意味やね。プリントに刷って配れば済むことばかり。」

H 「でも、あかんからすぐやめるんじゃないかって手を尽くしてからにしたら。」

D 「しかし千五百人が相手やし難しいよ。」

G 「学年別にしたらどう？マイクも聞こえにくいし。」

F 「成程、いい意見やね。」

E 「私はあんまり効果ないと思うな、もともと生徒側に、自治会なんて関係ないって意識があるから。」

H 「そういう意識は、文化祭が出来なくなったりクラブ予算が無くなったりして、よほど追い込まれないと変わらないんじゃない？」

E 「でもいやいや集まるんじゃないや今までの繰り返しでしょう……生徒の意識が変わらない限り改良の効果はないと思う。」

司会 「意識の向上か。むずかしいなあ。」

板ばさみの心理

司会 「役員の名前をみんなに知ってもらったとしても、それは自治会への意識向上にはつながらないと思う。一口に意識向上って

言うけれど、どんな状態になればよいのでしょうか。」

H 「やっぱり、信頼を持てます」と言われるようでないかね」

D 「うん、それはあると思う。」

E 「しかしそれには大多数の生徒の希望をかなえていかんとあかんやろ。役員にならんと分かんやろうけど、学校側の規制も厳しいよ。ちよつと締め過ぎやと思う。」

F 「けど学校の中での自治会やろう。ある程度は仕方ないよ。」

E 「ある程度を越えてるんじゃない？やって悪いことじゃないんだけど今まで通りにおきって、そんな風に理由もなく反対されたら自治会の人もやる気なくしてしまうよ。それが伝統かも知れないけど……」

司会 「もう少し自由に活動させて欲しいってのが本音の部分やね。」

D 「それもそうだけど、生徒の方だって自治会の動ける範囲を知らなさすぎるんじゃない？たしかに生徒の希望をかなえていくのが本当のところやと思うけど……。でけへんからってやってないように思われてるわ。」

E 「自治会やからやるのがあたり前」みたいな他人まかせのところがあある。」

D 「そうそう、役員だけが特別視されてる。」

H 「そこに意識改善の必要があるんやね。せめて、おれらの代表、ってくらいに見てくれたらいいんやけどな。仕事だけおしつけてやっかい払いしてるみたいで……。私達、全然信頼ないね。」

はばたけ、改善計画

司会 「昨年度から、生徒の意識を改善するという目的で自治会改善

計画が発足しましたが、会長さんはどんな風に進めているのですか。」

会長 「うん。とりあえず学校内であたり前に実行されるべきことをあたり前にやっていくってことを目標にしたい。例えば、朝礼をするならきっちり時間どおりに集まる、掃除もきっちりとしていく、そんな風に……」

A 「それを自治会改善計画にするわけ？」

会長 「自分でも妥協してるようで嫌やねんけど……会長になって現実に直面してみると、計画を進めてゆく難しさにつぶされてしまってた。ただ、そういう土台っていうのかな、はじめある状態が出来てきたら改善計画も決して難しいこととは違うと思ってる。」

A 「投書箱を活用させるという案はどうなったの？」

会長 「近いうちに設置することにししよう。」

F 「自治広報をもっと増やせないのかな？」

D 「あつそれは出来ません。予算が少ないからあんまり紙使うと文句言われるんです。それにいったい何人読んでくれるんだ

Look!!

It's

THE 自治会



ろうって思うと……」

F 「じゃあ壁新聞つくったらどう？みんな見てくれると思うよ。」

H 「かわいい看板立てて、自治会コーナーとか作ったり……だいたいね、今の自治会ってアピール不足なんじゃない？」

D 「うん、一箇所でもいいから何か貼って欲しいな。」

自治の基盤、クラスにあり

司会 「各クラスの副会長が集まって構成される代表会議も形ばかりになってるのが現実ですが、何とか変えてはゆけないでしょうか。」

会長 「この前がっかりしたんやけどね、代表会議で、友情の絵はがき（チャリティ基金）の承認を採ったら、ほとんどの人が承認してくれたんです。ところが、では各クラスでの販売はあなたがたにお願いしますって頼んだら一斉に「エエー」と言う声が上がった。めんどくさいことをするのがいやなのは分かるけど、自分で承認したことぐらいはもっと自覚を持ってほしい。会計の仕事やと思ったのかな？とにかく身勝手なんだから、かりした。」

B 「オレ友情の絵はがきなんて知らなかったぞ！」

会長 「えー、全然伝わってない……」（あきれた様子で）

D 「私のクラスは副会長がうまくやってくれたけどな。」

C 「このままやったらあかん。絶対代表会議変えなあかんて。」

I 「クラスから二名ずつ出席することにしたらどう？会長と副会長と。その方がクラスの代表として意見出しやすくなるんじゃないかな。ただ、人数が多いと場所が問題になるけど。」

A 「二人やからこそ一人が来なくなるかも。」

I 「二人やからこそ意見も出やすくなるんじゃない？」

F 「それは執行部のやり方しだいやと思うな。」

* * *

C 「それともう一つ、だいたい代表会議は行った時にはじめて議題言うんやろ。その場で、さあ承認採りますって言ったってその承認は一人の意見であってクラスの意見にはならんやんか。事前に議題を伝えといて、クラスで話し合ってもらってから会議を開くのが本筋じゃないのかな。」

D 「そうそう、私もおかしいなって思ってた。だいたい大手前って学級会めいたものがないやんか。なんでクラスの意見聞けへんのかなって私、入学した時から疑問に思ってたん。」

F 「しかし、実際にクラスで話し合えるような時間とれるかなあ」
C 「簡単な問題なら朝のホームルームなんかをつかって意見を聞くことも出来るんやう？三日ぐらいあれば何とかかなるよ。」

会長 「成程やれそうやね。」

D 「うん、難しいけどそういう話し合いを増やしていかないとにはクラスと自治会はつながらないよ。」

H 「つまり、クラスの延長線上に自治会がある、という意識を形成することが必要なんだ！」

司会 「もう少し詳しく言う……」

D 「みんなが自治会の普通会員で、クラスの中に代表者がいて、代表者が会議に出て自治会に意見を出す。その意見を役員がまとめていく——もちろんこの逆方向も成立する、ということね。」

茨の道、自治の道

司会「さっきの代表会議の件だけど、事前に話しあってもらうために議題や注意点を各クラスに伝えておく必要があります。この点はどのようにするんですか。」

D 「代表会議を二度開くのではやっぱり反発があると思う。」

C 「印刷して、役員がクラスまで配って廻ればいいねん。お願いしますって。」

D 「それが一番いいね……役員が労力を惜しまないなら。」

C 「そりゃあ役員は、やります、がんばります。って立候補してきたんやからやるのが当然ちゃう？それこそやってあたり前やろう。」

D 「そうね、この次からでもやるべきね。」

H 「——地道な活動っていうのも大切みたいやね。」

D 「うん、行事で派手なことやろうとがんばるのもいいけど、やっぱり日頃の活動もみんな見てると思うねん。生徒は自治会に無関心やって言われてるけどアンケート見るとやっぱり苦情も来てるやろ。何でもそうやけど、できてあたり前のことを曖昧にしてたら認められへんのやね。」

J 「うーん、それもあるけど僕はもっともって生徒の要望をぶつけていって学校側と意志の疎通を図るべきやと思うな。」

D 「確かにそうやけど……」

司会「何だか注文がたくさん出たね。」

F 「どれも難しい問題ばかり——これは茨の道やわ。だけど何となくこれからが楽しみな気がするな。」

(この座談会で提示された代表会議改善案はその後常任委員会で討議され、改案後承認されました。みなさんの意見を自治会活動に反映させて下さい。)

——アンケートにお答え下さった方々、座談会にお越し頂いた皆様、本当にありがとうございました。



府立高専訪問記



☆広大なグラウンドと近代的な校舎

寝屋川市駅から数十分のところに、私達の訪れた府立高専はあります。校門をくぐると素適な前庭風景が目に入り、構内というよりは、キャンパスというにふさわしい高専の雰囲気にかき立てられていました。とにかく広いのです。

高専のグラウンドは、我校全体がすっぽりと入ってしまうほどの広さなのです。もっとわかりやすくいえば、四百メートルトラックがあり、その横でラグビーやサッカーができるのです。また、テニスコートとバレーボールコートが四面ずつグラウンド内にあり、更にハンドボールコートまであるのです。こんなに広いと整備などは大変だろうなと思いますが、何でも口頃使わないバレーボールコートのあたりは、放ったらかしにしておくすぐに雑草なんかが生えてきて、はたまた夏になると、近所の子供達が、ざりがに取りにもぐり込んでくるとか……。便利な点というのは、グラウンドを使用する運動系クラブが一度に練習できることだそうですが、それでも少々もてあまし気味だそうです。

校舎では、時計塔があったり、我校には感じられない優美さと、空間の美を感じました。

☆活発な活動の学友会

高専には、我校の生徒自治会に対して「学友会」というものがあり、会長・評議会・執行部の三部門に分立し、昨年度から会長の下

に、会長会務補佐委員会という機関を設立して強化に励んでいるそうです。評議会とは、常任の意見を回収して執行部活動に反映させるためのものだそうです。執行部の下には、いろいろな局があってこれは、我校の部にあたり、規模の違いを感じました。

☆華やかな高専祭

さて、高専祭は、毎年十一月上旬に行われ、前夜祭・本夜祭、後夜祭といった本格的お祭り気分になれるわけで、その年の話題になった映画の上映や、カラオケ大会、さまざまなゲームが、全開放で午後の七時頃まで行われます。ここ数年、雨のためにお流れになってしまっている第二部のフォークダンスを思うとうらやましい限りです。また、四つある各科ごとに展示がなされるわけですが、その中でも毎年恒例になっているのが、土木工学科の橋梁製作だそうです。実際に私達もキャンパスを案内してもらって、そのまま展示されているのを見たのですが、本当に使用されている橋に負けず劣らず、立派なできばえでした。あと、バンド演奏などのために特別に設置される野外ステージなどの華やかな照明等は、電気工学科の学生さんの仕事で、毎年、鮮やかなものができあがるとか……。こういうところにも、高専にしかないものを感じました。

☆四回しかない考查

修学期間が五年ということもあって、かなり普通高校とはシステムが違うようです。一限は五十分で同じなのですが、一日八時限授業で、四、五年になるとほとんどが専門課程で毎日レポートに追いつまわられているとか。学期は、前・後期に分けられていて、年間四回しか考查がなく、訪問に参加した生徒諸君の間からは、しきりに「いいなあ。」という声もあがっていましたが、高専生の方々にして

みると、それだけに範囲は広いし挽回の時は大変なんだそうですよ。

☆大らかで自由な校風

校風も、面積と比例して大らかというか、自由というか、キャンパス内は、私服の学生さんでいっぱいでした。中にはちらほら、詰め袴の方もいらっしゃいましたが、制服の私達が集団で入っていたのですから、多少は皆さんの視線を集めた？と思います。そんなことはさておいて、年齢層が十六歳から二十歳ということもあって、単車・自動車の免許取得可、五年生にのみ、キャンパス内での喫煙が認められているそうです。そういうことからどうか、生徒ではなく、学生と呼ばれています。

☆心に残る思い出の数々――クラス旅行

普通、最終学年というと、メインになる行事の一つに修学旅行があがってきますが、高専では、それぞれ学生さんの必修科目の都合（実習・見学）によって、修学旅行はないのだそうで、その代わりに「クラス旅行」があります。いい思い出を残そうじゃないかということで、自分達で全てプランを立て、休暇を利用して、思い出づくりの旅に出発するのだそうです。

☆プリンター用紙の成績表

キャンパスの広さもさることながら、（非常に広さを強調しておりますが、どうかこの意味を御理解下さい。）各種施設がまたすごい。約二百人を収容できる視聴覚教室。これは、映写・映像・音響などが完備されています。授業の関係上、マイコン室などもありました。そのコンピュータの中に、なんと学生の成績がすべてインプットされるそうです。ですから、成績通知票というものはなく、査査その都度に、何と、あのプリンター用紙に、ワープロの文字で成績が

うち出されてくるそうで、入学当初は慣れなくて、親御様もびっくりされたとか。さすが工業高校。

☆就職と進学

工業高校で思い出しましたが、高専の場合、入学される方のほとんどの志願理由が、機械をいじったりするのが好きだとか、国語とか社会を勉強しなくていいというのが多く、また、九割近くが、有名企業に就職されるそうです。（就職率三百パーセント、但し求人ですが、それでもいいですよ。）最近、編入試験を受けて、国立大学に進学される方が増えてきているそうですが、その多くは大学院に進まれて、専門を研究されるそうです。

☆高専の女子学生

学生総数千人弱に対して女子人数は、二十人もいないそうで、特別な存在なんです。きっと。例えば、女子にだけ更衣室があったり、男子ばかりのクラスに比べて、女子のいるクラスでは、授業をするにも少々気を使うこともあると、教授陣からちらほら。柔道などは寝技以外は一緒にやったりして、うまくこなしている授業もあるとか……。

学科によると、女子が全然いないクラスもあるので、男子だけのクラスの学生さんに言わせると、雰囲気が違うとか、もうあきらめの境地にいるみたいだとか……。それに、女子の勢力は強いそうですよ。どこの学校でも同じですね。

◆ ◆ ◆
最後になりましたが、この訪問記に協力を頂いた方々に厚く御礼申し上げます。

School Life

〈行事紹介〉

クラブ紹介（四月）

新入生の皆様のおこしを心からお待ちしております。

前期自治会役員選挙（四月）

前年度後期役員の人徳と顔の広さがものをいう。

校内バレーボール大会（五月）

学年関係なし。先輩／あなたたちのお心は、千尋の谷に子をつき落とす獅子のそれか、それとも……

コーラス大会（六月）

あの……声さえ出ていればよいというものではないんですけど……

文化祭（六月）

「文化」それと向上心の権化のような「テーマ」。しかし、我々大手前生は……

恒例文化祭反省

「テーマと現実がかけ離れていた。ああ……私たちは何て悪い子なんでしょう。」

一年水泳訓練（七月）

運動面ではどうしても満たされない本校の一年生諸君／今こそがマンの時ですゾ。

水泳大会（九月）

夏休み明け最初の行事。その盛り上がり方は大手前一かも。

体育大会（九月）

本校最大の体育的行事。

「体育大会を制すものは、すべてを制す」とばかりに、このビックタイトルを虎視眈眈とねらうクラス、ひたすら応援に力を注ぐクラスなど、とにかくにぎやかな日なのです。

後期自治会役員選挙（九月）

「校棄？」

「あの……後期なんですけど……」

球技大会（十一月 男子 バスケットボール 女子 ハンドボール）

そろそろ下剋上が始まる。

文化系クラブ発表会（十一月）

文化祭と並び、文化系クラブの晴れ舞台。

スケート教室（十二月）

見た目 成人

くつ履きや 学生

滑る姿は 仔ベンギン

大阪城マラソン大会（二月）

大手前生の財産？の大阪城を、ひたすら走る。ああ……コース途中に立っておられる先生方が憎い……。

予餞会（二月）

読んで字のごとく、お世話になった三年生の先輩方への餞の会。

球技大会（二月 男子 サッカー 女子 バスケット）

一・二年の間での戦国絵巻。

スキー教室（三月）

一年生の希望者のみ参加。滑れない人も必ず滑れるようになる白銀の世界に繰り上げられる四泊五日の楽しい旅行。

コーラス大会の思い出

二年四組 松元 佐和子

私達二年四組は、何のとりえもなく、まとまりもなく、たださわがしいだけのクラスです。だけど、五月の末に行われたコーラス大会の予選を何と、一位で通過してしまいました。今年の課題曲は、「投げようリンゴを」という明るく、軽い感じの覚えやすい曲でした。だから、各パートとも曲を覚えるのは早かったし、みんなも練習していて楽しく歌えていたようです。でも、男声は、高い方のgの音が出なかったり、細かいリズムの所でうまくあわなかったり、女声の方では、急に音程の上がる所で上がりきらなかったりして、とにかくそれをうまくいことごまかすのに必死でした。それに、三年生の半分の人数で歌うし、経験も浅いので、せめて、本選に出場できたらいいのになあという事しか考えていませんでした。ところが一位で通過したので、みんなどれほどびっくりしたことか。

それから、とても大変でした。三年生みたいに本選の曲は決めていなかったし、せっかく予選が一位だったのだから、本選では、あまりいい加減な合唱をみんなに聞いてもらうわけにはいかないということ、私達にふさわしくなおかつ練習しがいがある、三年生の人数にまけないような大きな声で歌える曲を探すことにしました。その結果、組曲「威王」の中の「吹雪」という曲に決まり、二週間後の本選に向かって練習し始めました。だけど、この曲は予想以上にものすごく難しく、男声も女声も初めほとんど声がでませんでした。それに、大変激しい曲で、みんな練習する度に疲れはてて

いました。それぐらい大変な曲だったので、みんな自分のパートを歌うのが精一杯で、四部でうまくいことあわそうにも、なかなか合いませんでした。こんな絶対、本選で歌うどころか、合唱にさえならないと思っていました。だけど、いつも非協力的な男子が、急にがんばりだして、休み時間なんかでもパートごとに集まって練習したり、女子も高い声が出るようにいつも声を出してみたりしていました。とにかくクラス全体が、コーラス大会の本選に向かって一つになってがんばっていました。本選はとても大きなホールで行われるので、予選みたいにちゃんと正確に歌うだけでは、三年生に迫力まけてしまうだろうし、「吹雪」は平凡に歌ったんじゃ、全然曲らしくない曲だから、四部ではまあなんとかあうようになってきた時点から、おおげさな強弱をつけてみたり、わざとアクセントをつけてみたり、いろいろと難しいことをやってみました。もしこの時クラスがまとまっていなかったとしたら、こういうことは、かえって失敗していたかも知れません。そして結局合唱は仕上がらなかったと思います。でも、すごいことに、これをやったことによって、かえってみんながんばって、声も出るようになり、音程も安定してきて、その上、50人足らずの合唱とは思えぬ程の迫力が加わり、「吹雪」らしくなってきたので、これでやっとみんなの前で歌うことができるなあと思うことができました。そう思ったのは、本番前ぎ



3ヶ月間柔道着洗ってへんのがなんがわるい



りぎりの小ホールでの練習の時です。だから、前日までみんなどれだけ不安で、プレッシャーがかかっていたことか。でも、それにしてもたった二週間でこの「吹雪」というとても難しい曲を仕上げ、その上優秀賞まで頂いたということは、二年四組の一人一人にとって、とても貴重な経験であり、二年四組が大きな顔をして自慢できる唯一の勝利であり、大手前の中で一番団結力のあるクラスだという証拠のように思われます。

また、私自身もこの二年四組の中で、「吹雪」を仕上げたことによって、音楽は人の心をつなぐ力をもっており、また仕上がることによって、喜びというものを私達に与えてくれる、とても偉大なもので、その音楽の偉大さを知るためには、もっともっと自分自身がその曲を、楽譜を勉強して、その中に隠されているものを、少しでもたくさん見つけ出して、一回しかない本番の為に、その本番で、人々に音楽の偉大さを伝える為に、一生懸命努力しないといけないという事がよくわかりました。みんなもそれぞれ「吹雪」を歌ったことによって、いろんなことを思ったり、感じたりしたことと思います。コーラス大会という行事は、今の時期の私達にとって、重要な行事のように思われます。

クラブ体験談

友情 (FROM 剣道部)

稲田 文司

私は今まで部活動をしてきて本当によかったと思う。では一体、何がよかったのか。

まず第一に友達ができるということである。そりゃクラスにだって親しい友人はたくさんいる。しかし十何年間学校生活をしてきて感じるのは、どうしてもクラスメイトというのはクラスが変わると「BYE・BYE」というのが多かった。

が、同じ部の友人というのはどうか。

同じように苦しいことを乗り越えてきただけにそれだけ親密になれるのではないか。そう思う。

例えば私達の場合、夏の暑さ、冬の寒さというものをクラスの友人に話しても分かってもらえないだろうか。屋内競技なのに口射病になったり、面をつけたまま吐いた奴もいた。

こんなことを話しても分かってもらえないわけもない。そんなことを考えると同じ部の友人というのはいいものだ。本当の仲間って感じもするし、私にとって剣道部の友人は本当に大きな存在だと思う。そしてやはり同じ一つのことをやっているせいだろうか。似たも



友情とは成長の遅い植物である

の同志が集まってくる。まあ中には正反対の奴もいるが。

そんな奴らと馬鹿なことを言ったりして喋っていると実に楽しい。こんな時に部活をやっていてよかったなあと思う。部活をやっている奴なら誰でも一度はそう思ったことがあるんじゃないだろうか。

部活は決して無駄ではないと思う。試合となればレギュラーになるために闘争心を燃やすし、誰かが挫折した時はみんなで励ましてやったり。

このように敵になったり味方になったりしてやっている内に、本当の友達というものを見つけたのではないだろうか。

水泳部——178の存在

二年九組 たぬき娘

私は九月のおわりに水泳部を引退した。

練習はしんどかったけれど、水泳をやめたと思ったことはない。精一杯がんばったから、自分自身がいくらか成長できそうな気がしたから。ベストを尽くした時の自分の限界を知りたかったから。



中学の時に始めた水泳。高校に入って、何人もの先輩や友達を目撃しながら、もっともっと好きになった。私はずっと、クラブ活動のために学校へ来ていたと思う。

あの狭いプールに、一コースで七人ほど。五秒間隔で何度も何度もターンして泳いだ。同学年では私だけが背泳専門で、まわりを見

れずに、ぶつかったりけられたりしてばかり。夏にはきれいにゴールの日焼け跡がつくので、「先輩に、たぬき」と言われた。クラブのみんなにもおもしろがられた。何処へ行ってもまわりの人の不思議そうな視線……。鏡を見ることに暗くなっていったのに、今では何故か懐しくなってしまう。

一年生三〇人、二年生三三人、三年生二五人——。随分多くの人たちと知りあえた。同じような気持ちで泳ぐ人たちといつも一緒だった。私にとって、友達や姉妹のように仲良くなれた先輩と後輩もいる。一年半のあいだ、毎日とても充実していた。

現役時代は終わったけれど、私はいつまでも水泳部員の一人でありたい。

演劇バカの演劇

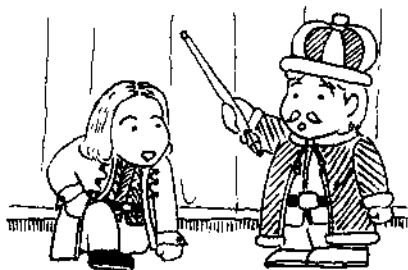
二年一組 しなの 秋 弥

開幕前の、あの緊張感がとても好きだ。今まで何度かの舞台を経験してきたが、たとえ端役であったとしても緊張するものだ。緊張というのだろうか、不安と、期待と、無数の感情が入り混じった、複雑な感覚である。実際、開幕前に緊張している時には、何もわからない。その感覚に気づくどころか、舞台はうまくいくのだろうか途中で台詞を忘れたりしないだろうか、などと考えて、その場から逃げ出したくなる程である。その時には、もうこんな気分は味わいたくないものだと思っても、何故か舞台から離れることが出来ないのだ。舞台の持つ魔力にでも捕えられているようなものである。まるで舞台中毒だ。

演技をするのが好きだ。しかし単に演技をするのが好きだけでは自己満足に過ぎない。観客あつての演劇である。自分が演技することによって、観客に何らかの感動を与えなければならぬ。演技者は常に観客のことを念頭に置いていなければならないのだと思う。よく、役になりきるといふことを言う。しかし、常に自分を持っていなければならない。又は、その役の中に自分を置くと言つた方がいいかもしれない。

であるのだというところなのだと思つてい文化祭に始まり、予餞会。脚本は、脚創作したりする。二つももらった。演技者た上で書いたつもりつきり言つて、大手書くのはしんどい。

いかなのだ。普通ならばウケるであろう場面が、ここではウケない、といったところが幾つもある。反応がシビアなのだ。つらいところである。



つまり、自分自身とを、役の上で確認する。

文化系クラブ発表会本集からひろつたり度ほど脚本を書かせや観客のことを考えだが、苦労した。は前で上演する脚本を何しろ一筋ナワでは

大手前には技術的な、というか、指導者らしき指導者がいないというのもつらい。本来なら、その脚本につき、演出者等がつくものだが、ここではほとんど演技者にまかせてある。それはまたそれで良い点もあるだろうが、演技者は、数少ない部員のアドバイスを受

け、自分の演技をみがくしかないのだ。あとは観客に指導してもらうしかない。

演劇。たかが演劇。と思う。しかし、そう思いながらも演劇から離れられない演劇バカが、ここにいる。その演劇バカが最後に書くべき言葉はただひとつ。やはり、演劇万歳、なのである。

変人クラブと呼ばれて(理研)

二年二組 富士英清

理化学研究部というところ、みんなは変人クラブだと思つていらつしやる様ですが、実はそうなんです。こんなことをおおびらに言うとか、クラブの連中はこぞつて「わたしはノーマルだ。」などと言いますが、理研のノーマル一般のアブノーマルなんです。一部には、理研の人間はビールでコーヒを飲むとか、部長がロリコンだとか、はては足が八本ないと入部できないとかいう人がおりまして、私も人前で「俺は理研人だ。」と言えず、日の当る場所にも出られなくなつてしまいました。ぜったいにそんなことはないと言えるかという胸をはって答える自信も毛頭ありません。

文化系のクラブというと、運動系の人から見るとでんでお遊びにしか見えないようで、毎日楽に暮していると思われがちですが、どのクラブとて苦しいのは同じことです。まず第一に予算が苦しい(毎年毎年削られてゆくこの辛さ、クラブの部長をやつていればわかりますよね。)苦しい中でなんとかやりくりする。なかなか良い心掛けですが、心掛けだけでは飯は食えねえ、とクラブの会計に

文句を言われます。毎日身のはそる思いです。(自治会発行の本にこんな愚痴書いていいのかな。編集でカットされてないからいいんでしょう。)

理研はまだまだ虐げられています。ある日私はある先生と話す機会を持ちました。先生は私にこうおっしゃいました。

『理研は理系の代表みたいなクラブやろ、そやったら理研が率先して大学受験の勉強せなあかんのとちがいますか。(理研は)大学の理科学への踏み台みたいなもんやし、高校のレベルで入ったことはだけへんのやから。やっぱりみんな勉強会でもした方がためになるんとちゃうやろか。どう? 部長自ら放課後の補習受けに来たら?』

私は非常に腹がたちました。それでは一体なんの為のクラブか判らない。こんな貧相で雑多で騒々しいクラブでも一応やることはやっているんだ。そりゃあ難しいことは知らないけれど、高校生には高校生にしかできないことがきつとある筈だ。(なんか気恥ずかしいセリフになってきた。) どうしてそうお遊びにしか見てもらえないのかとても不愉快でした。

私たちのクラブがどんな活動をしているか例えば夏の合宿(文化部で合宿があるという大抵の一般市民は目を丸くします。)一つをとってわかんと思えます。野外での流星観測が目的ですが毎年夏休みに丹後半島まで行きます。重い観測機材を運んで現地では夜通し空を見続け、昼間は寝ているという不健康な生活を三日も続けます。もっと悲惨なのが一月三日の流星観測会です。新春早々零下何度の夜空の下で一晩中空をみていなくてはならないのです。私もこの寒さで去年初風邪をひきました。こんな具合に、理研は目立たな

い所で辛く苦しい活動をしているのです。(御天道さんの下で活動できるなんてなんと羨ましいことか)それでも途中で投げださないのは、みんなクラブ活動に燃えているからなんです。自分のクラブに誇りを持っているからなんです。(読み返すと自分でも頬が赤くなってくる)正規の活動を捨てるなんてもってのほかです。

いつの世にも言われることですが、近頃の若いものすることはなっていない。この本が出る頃には彼らもう二年生になっていることだろうが、はたして立派に後輩の面倒をみて、このクラブを背負っていつてくれるかなと思うと私はとても不安です。先輩の言うことを聞かない、不平ばかり言う、主体性がなさすぎるなどですがこんな彼らに対して私たちは殆んど何もしてやることはできませんでした。見通し暗いです。ホント。『案ずるより生むがよし』なんていってますが、俺あ、知らねえよ。

以上、くだくだしくふびんな理研を書いてきましたが、こんなクラブでは部長をやっていると疲れるんです。まあ一年やってきてみると結構世渡りがうまくなっています。



新任先生紹介

山本耕史先生

。担任教科—数学。昭和30年10月18日生まれ。出身高校—豊中高校。購読新聞—朝日新聞。モットー—誠実

—趣味は何ですか。

「うーん。そうですね。数学の専門書読んだり、睡眠かなあ。」

—教師になった理由は何ですか。

「えーっと、ちょっと見当がつかないんですが、数学が好きだったからというところでしょうか。」

—教育方針は。

「自主的に学習する態度を育成したり、社会に貢献できる人間になつて欲しいということですね。」

—今までに一番印象的なことは。

「いろいろあつて一口では言えないなあ。強いて言えば良い先生に恵まれたことですね。まあ今までだと高校時代が一番充実していたと思います。」

—人生観について少し……。

「自分で考え、自分で行動すること——」

—大手前生へのメッセージを……。

「いろいろな方面で活躍して欲しい。又、視野の広い人間になつて欲しい。」



て欲しい。」

—将来への抱負は？

「うーん、そうやねえ……今は別にありませんけど、一日一日を充実させたいと思います。」

岡多賀彦先生

。担任教科—数学。出身高校—三國ヶ丘高校。購読新聞—毎日新聞。昭和20年9月20日生まれ

—趣味は何ですか。

「遊び、です。」

—教育方針は何ですか。

「できるなら、稲川先生や広田先生の穴うめをしたいと思います。」
—大手前生に何かメッセージを一言……。

「社会に出て、いろんな方面で活躍できる人間になつて欲しいですね。泥くさくやっていれば、いつかは花が咲くものだから、地道にこつこつやって下さい。」

—毎日放課後行っている補習についてお聞かせ下さい。

「僕はまだ半人前なので授業で十分できないところを補いたいと思っています。わかりやすく説明しているので、どんどん出席してもらいたいですね。スプーン一杯の勇気ですな。」

—毎月2・5通信を出していることについて何か……。

「一日一つのテーマについて完結しているので、わからない問題に出会った時はペラペラめくって調べて下さい。」



雪 矢 敏 明 先生

。担当教科—英語。昭和28年3月31日生まれ。出身高校—東住吉高校。購読新聞—読売新聞。モットー—誠実



—趣味は何ですか？

「カメラや読書・ハイキングをしたりです。」

—教師になった理由は何ですか？

「中学時代の英語の先生が魅力的だったからです。」

—教育方針は？

「常に自分を失わず、自分の意見をハッキリと人前で言えるような人間形成や、型にはまってもいたくないということですね。」

—今までに一番印象的なことは？

「えーっと 幼年時代 運動会で転んで 前歯折って痛かった事。小学生時代 好きな女の子とフォークダンスで手をつなげた事。中学時代、番長に殴られた事。高校時代、よく勉強したこと。大学時代、いろんな大学とクラブで交流できた。教師時代、全国教員英語スピーチコンテストで優勝してアメリカへ行けたこと、ですね。」

—大手前生へのメッセージを……。

「何事にももっと欲を出し、応用力のある人間になって欲しい。」

—家族構成は？

「母一人、妻一人、長男一人 長男は、つい最近生まれてね。初めは実感がなかったんだけど、抱いてみると、なんだか嬉しくなっ

てね、ああ僕の息子なんだあって。たいへん 可愛いんですよん。」

藤 井 美保子 先生

。担当教科—英語。昭和35年12月21日生まれ。出身高校—広島県立呉宮原高校。購読新聞—朝日新聞

—趣味は何ですか？

「旅行です。お金があれば海外旅行

がしたいです。最近北海道へ行きました。ちょっと前に、アメリカへ行きました。あと映画鑑賞も趣味です。」

—モットーは何ですか？

「いろいろなあるけどね。好きな言葉だったら、努力、ですね。」

—教師になった理由は。

「いつまでもつづけられるということと、自分も向上できるという事です。」

—学生時代は、どんなクラブに入っていましたか？

「中学時代は、プラスバンド、高校時代はE・S・Sです。」

—大手前の印象について何かお話し下さい。

「伝統があると思います。あと学校行事が盛んですね。それから生徒がおとなしいですね。いい意味でも悪い意味でも……。」

—大手前生へのメッセージを……。

「何でも意欲的に、目標をもって取りくんではほしいですね。それともっと礼儀を重んじて欲しいナ。」



中川道広先生

。担当教科—化学。生年月日—不明
 。購読新聞—毎日新聞（毎日新聞主催
 の映画の切符がもらえるから）。出身
 高校—阿倍野高校



—趣味は何ですか？

「読書、パソコン、ハイキング、市内散歩、オーディオ、音楽など多数。」

—教育方針は？

「生徒のみなさんの成長に少しでも為になるようにあらゆる努力をし、共に学ぶ喜びをわかちあいたい（ちょっとカッコよすぎたね……）」

—大手前生へのメッセージを……。

「内に秘めてる情熱を外に出して欲しいと思います。又、私には「みっちゃん」や「○虫」やその他いくらかニックネームがあるようです。あまり言わないで欲しいね。」

—これからの抱負は？

「どんなことでも興味を持ち、毎日充実して生きているなと実感できるそんな生活をめざしています。」

—つけたし

とにかく人気のある楽しい先生で授業中もギャグをいいて来ているのか授業をしに来ているのかわからないほどです。少なくとも中川先生の授業では眠る者もおらず、大手前の重圧感も解消されます。

廣田 豊先生

。担当教科—地学。生年月日—不明
 。出身高校—兵庫県立宝塚東高校
 。購読新聞—朝日新聞



—趣味は何ですか？

「あえて、これ、というほどのものはないですね。」

—モットーは何ですか？

「一所懸命生きる、ということですね。」

—教育方針は、何ですか？

「教育方針ね。すべての生徒さんに基本的な地学の知識をつけるということ。人間的な面でより豊かな人間になってもらいたいということですね。」

—教師になった理由は？

「教育方針で言ったようなことに意義があると思ったからなったわけですね。」

—大手前生の印象は？

「ふつうの高校生ですな。」

—大学の時は何を研究していましたか。

「大学では地学を研究していました。」

—どうしてですか？

「おもしろいから。」

P.S. いつでも遊びに来て下さい。

木元（小寺）則子 先生

。担当教科―社会。昭和31年9月20日生まれ。出身高校―大手前高校。購読新聞―朝日新聞を購読しているが学校では主な新聞を読むようにしている。

―趣味は何ですか？

「旅行と読書ですね。」

―大手前生の印象について何か……。

「千差万別、多種多様ですね。でも明るくて素直な人が多くいるのでは……？ 私達の頃とまた雰囲気は違うけれど、でも同じような面も多いですね。」

―生活信条・モットーなどをお聞かせ下さい。

「できるだけどんなことも、一所懸命やってみようなんです……。ぬけてることも多いだろうなあ。今は焦るけど体がついてこんという感じですね。自分の時間というのが少なくて本が読めないのが気にかかっています……。」

―現代社会について……。

「範囲が広いのでたいへんです。それにとりとめがないですね。でも精一杯やっています。」

―新聞発表をしていて今の生徒をどう思われますか？

「クラスによってもちがうし、人によってもちがうので何ともいえませんが、でも一所懸命してほしいですね。」



井上泰佑 先生

。担当教科―理科I（生物・化学）。昭和22年1月12日生。家族構成―奥さんと娘さん。購読新聞―新聞もテレビも今ありません。出身校―大阪学芸大附属高校 天王寺校舎

―趣味は何でしょうか？

「多趣味です。しいて言うなら魚釣、コンピューター、スキング、スキー、あと大学時代に熱中した将棋ですね。ハイ。」

―教育方針を……。

「『頭が悪くてもやればある程度のことではできるんや』というような反面教師みたいなものですね。ハイ。でも大手前生は頭が良いですからねエ。」

―教師になった理由は何でしょうか？

「実は教師になるつもりは無かったんですよ。でも、こう生き物がですね、人間と違って精一杯生きてんねんなあということが伝えられればと思ったりします。なんてカッコ良いこと言ったりしますがね……。」

―最後に人生観について一言。

「前に水泳部の顧問をやっていた頃に感じたのですが、人間というのはやってもできへんことがあるねんなあ。でもやっぱりやらんとあかんねんなあと思って後から性格まで変わりましたね。」



岸田典久先生

。担当教科—倫理・現代社会

先生が御多忙の為に、インタビューが出来ませんでしたので、岸田先生について学校内でいろいろな声を拾ってみました。



まず先生の授業を受けている、もしくは受けたことがある生徒さんの声です。

「授業がうまいですね、それと話の展開がうまいですね。」

「熱心な先生やなぁと思う。」（この声が一番多かったです。）

「個性的と言うか、何と言うか……。」

「私は仕事から逃げていると言いがら、しっかり仕事をしてるんやね。岸田先生は。」

「色でイメージすると茶色かなあ。」

「どうやって集めるかわからないくらい物を良く知ってるね。」

「覚えているのは、黒板に左手でも書かれることと痛烈な批判をされることかなあ。」

次に、担任をなさっているクラスの声です。

「生徒のことを考えて下さっているやさしい先生ですね。」

最後に顧問をなさっているサッカー部の声です。

「外見は頼り無さそうに見えるけど、一番頼りがいがありそう。」

「技術などのことより精神について教えて下さる。」以上でした。

先生は現代社会・倫理の授業やサッカー部の指導に力を注いでおら

れます。

宮野恭一先生

。教科—保健・体育。生年月日—昭和

26年7月22日。購読新聞—サンケイ新

聞。趣味—酒（ぐらいかな）

。家族構成—母親と2人。



—教育方針は？

「個性、個性とさわぐよりも協調性を求めたいね。暗い子はみんなの環に入って行けるように、明るい子は身勝手にならないように、自分の欠点を補っていくことを集団の中で知ってもらいたい。」

—突然ですが、結婚の意義をどう考えますか？

「愛しあった人間と一緒に生活していくってこともあるけど、子供を産んで自分の生きた証を伝えてゆくことによって安心を得られるんじゃないかな。もちろんその子がどう飛び立ってゆこうが自由なんだけども、ある部分の世界までは責任もって面倒みないといけないでしょ。子供にはあたり前のことを確実に伝えたいな。例えばやさしさとか思いやりとか……今の社会って健常者中心で、障害者がいないがしろにされてるでしょ。ハンディをもった人たちの「生きる」ことへの情熱を感じれるような、人間としての共通のベース—温かさまでできれば伝えたいですね。」

—最後にスポーツ歴を教えてください。

「中学の時、ロバート・ボブヘンズにあこがれて陸上部に入りました。走り幅飛びで市大会一位になったこともあったんです。」

三 船 直 子 先生

。担当教科—国語科。(共通質問事項には否として答えない)

「出席簿抱えてキャピキャピ跳ね乍ら教室に入って教壇でつまづいて転んでそのまま動かなくなる先生」



——先生をこう形容した生徒がいるんですが(笑)。

「そして動かなくなる。棒でつついてみる。イメージあるね。」

——唐突ですが、先生の授業は…教育方針は何ですか？

「…結局。姿見かな…うん、鏡のかけら。つまり…何かを学ぶという場合、知識の量をふやすという面あるよね。でも、知識教えるのはあたしより(笑)参考書の方が多量かも。(知識を得る)方法は教えます。教師だから(笑)。と、同時に今の自分をそこで捉えられたら、それは古典の勉強だけで留まらないかも知れない。勉強している自分が見えてきたり、今までとは違った自分が見えてきたり…。」

——すると…その生徒の姿を映し返してやるのが先生の役…

「…あのね。あたしの方が規定していく側では、鏡でなくなるよね。あなたが自分でその像を捉えていくの。『ああ綺麗や』というのは見る側の主観で。どう映してやるかなんて立派なことは出来ませんよって思う。見る者が見るだけの世界かな。」

——はあ…それが先生の国語の授業と。

「それが私の人との接し方かもね。だからあたしも、生徒一人一

人の中に自分の姿を見る…もう(先生紹介を)やめにしたらいいのに…そんな先生はいなかった、きっとあれは夢だったんだって(笑)。
——あはは。(そうはいくかい)

竹 中 秀 樹 先生

。担当教科—数学。昭和36年8月23日生。購読新聞—読売新聞。出身校— 高校。趣味—映画鑑賞(邦洋問わず)。サイクリング・料理



——教育方針は何でしょうか？

「座右の銘として、常に建設への努力、これ即ち幸福なり、ですね。(この言葉の意味が本心にわかるのは、いつかなあ。)」

——大手前生へのメッセージを何か…

「自分の人生は自分で切り開いて行くものだから、若い内に失敗を恐れず何でもいから経験しておこう。その意味でも、もったのんびりとした長い目で自分の人生をとらえて欲しいですね。」

——御自分の主張は何でしょうか？

「人生とは感動すること。感動の無い人生なんて…。と最期に言えるような生き方をしてみたいです。」

——教師になった理由は何でしょうか？

「教師ほどやりがいのある仕事は無いと思いますけどね。」

——今までの中で一番の出来事は何でしょうか？

「そうですね。一番の出来事と言っても二つあるんですが、まあどちらが一番かわかりませんが、一つはやっぱり教師になって

初めて教壇に立った日のことかな。緊張の余りに自分で何を言っているかわからなかった。もう一つは大学時代に招待されて北海道へ旅行したこと。あの旅行は最高でしたね。」

館田 邦明 先生

。担当教科—数学。昭和32年6月17日生まれ。出身高校—春日丘高校。購読新聞—朝日新聞。家族構成—御夫人、お子様一人

—御趣味は？

「うーん、ない。でも寝ることが一番楽しいね。生きんのも死ぬのもしんどい。夢うつつになつて、頭がくさってくるねんな。もう、本なんか読まれへんって状態。」

—忘れられない出逢いってありますか？

「人生のすべてが出逢いかな。強いて意識し出したのは、大学の頃やけど。」

—それでも特に印象深いのは？

「大学のときの女の子やっただけど、その子と話してると、これから僕が言おうとしていることなんか、全部先回りされとって、完全に自分を読まれてしまっていた、っていうのがあったけど、あれはすごかったなあ。」

—高校時代は、よく何をやってました？

「サッカーばかり。あらゆる暇というものは、サッカーしottaね。サッカー少年 ン？ いやサッカー（少+中）年。」



—何かメッセージは？
「やりやすい!! 言うとすぐ従うが、反面、力強さを身につけて欲しいと思う。」

岡野 りか 先生

。担当教科—英語。昭和35年4月30日生まれ。出身高校—茨木高校

—趣味は何でしょうか？

「えっとね、やっぱり英語の本を読むこと、あと水彩画かしら。」

—学生時代は何のクラブをなさっていらっしゃいましたか？

「高校時代は、ギターとブラバンでした。大学に入って、点字のサークルに入って、ボランティアで点訳をしていました。」

—高校時代はどんな生徒でしたか？

「積極性の無い受け身の生徒でしたね。」

—大手前生へのメッセージを何か…。

「みんなおっとりしていて、勉強は良くしますけど、やっぱり積極性が欲しいなあ。それと私に対しても積極的に、何でも気軽に話しに来て下さい。」

—教育方針は何でしょうか。

「やっぱり積極性を持った人を、型破りの人が欲しいね。」

—「どうして見る度に先生の髪は短かくなってるのだろう？」という質問があるのですが…。

「(笑)なんか髪を切るのはクセみたいなものなんですよ。」

ENGLISH



—最後に理想のタイプを…。
「うーん困る質問ですね…。まあ誠実で心身共に健康な人ですね。それと私を理解しようとしてくれる人かなあ。」

長谷川 清一 先生

。担当教科—国語。一九五四年三月
一八日生まれ。出身高校—大手前高校
。購読新聞—朝日新聞

—趣味をお聞かせ下さい。

「高校の時、音楽部コーラス班の部長をやっていた、今も合唱。あと文楽鑑賞と文化部長をいびることですね。(笑)」

—はあ…では教育方針は？

「他人の痛みというものを分かってやれる人間形成、ということかなあ。」

—新婚だそうですが、結婚の印象は…

「毎日皿を洗っています。」

—教師になった理由を。

「中学時代の先生が誠実なんであつたのと、大学で障害児教育の講義を受け、感動したことですね。」

—国語の授業で何を感じられますか？

「本当に大手前はいきいきと生きているだろうか。未来に向って生きることに違和感があって、もっと他のことをしたい、ただ勉強だけでなく、もっと充実したものを求める気持ちがあるのかもしれない。」



ない。もがき苦しんだ末のはばたきはずっと素晴らしいものではないか—」

—では最後にモットーを!!

「生徒の立場に立って、生徒をいじめる…(笑)」

田代 武久 先生

。担当教科—国語。昭和26年1月26日
生まれ。家族構成—奥さんと子供さん
三人。購読新聞—読売新聞

—趣味は何でしょうか。

「趣味は少ないですよ。しいてどれが趣味と言うのはないですね。」

—出身高校はどこですか？

「春日丘高校です。高校時代はですね、文化部長をやらされましたね、プラスバンドを作らなければならなくなって、友達とガンバリましたよ。それでそのときに校歌の指揮—といってもメトロノームの代わり—をしました。」

—教育方針は何ですか？

「『基礎をしっかりと。』ですかね。」

—常日頃、世の中に対してどう思っていますか？

「自分と世の中に対して怒り狂ってます。平静な時もありますが、最後に大手前生へのメッセージをお願いします。」

「何事もまじめにとりくんで下さい。」





三つの人生

橋本 一雄 先生

今年は昭和六十年、昔流の数え方で言うと私も六十歳になったわけである。一つでも年をとりたくないのは同様だが、私の人生をふり返ってみると、この「数え年」で区分するとすっきり分けられそうな気がする。何故なら私は、これから今日まで私が歩いてきた人生を素直に伝えてみたいと思うからである。しかし、それが諸君にどのように裨益するのか疑問を持ちながら。とに角先へ進めてみよう。一つは二十才まで、次は四十才まで、そして今日の六十才までである。もちろんまだこの先生が続けたいと思っている。

最初の二十年は、云うまでもなく「我が青春」を含む時代である。滋賀県の山村に生まれ育った私は、いわゆるボンボンとして両親のちよう愛を受け不自由なく成長した。昭和十四年中学校に入学したが、だんだん戦争が激しくなり、支那事変から大東亜戦争（第二次世界大戦）へと発展した。私は、今でもそうだが、背が低かったので、単純な考えながらバスケットボール部に入った。しかし、二年後には軍事教練等にとってかわり、部の活動は禁止され、背は伸びずじまいになった（責任転嫁？）。私の通っていた中学校は県立水口中学校という、軍事教練のとてもきびしい学校であった。中学三年の頃であったが、四限が教練の時間で校外に出かけた（行軍という）。

焼きたてのパンのなんとも言えないかおりにさそわれて、つい、行軍しながら「腹がへったな」と言った途端、すぐ後ろにつけていた教官の耳に入り、「よし、そこでパンのにおいをかいでおれ」と遂に隊列からとり残される破目となった。無言行軍の罰としてその場に立たされたのである。叱られることを覚悟で教室に返ってみると、昼食の立会に運悪くその教官がきているのではないか。また叱られた。訓練の厳しさから言えば、中学校四年の時、一月の極寒の中で、膝まで水位のある川を、敵前上陸と称して渡ったのも思い出の一つである。また、当時泳げなかった私にとって一番いやだったのは、飛び込み台（高さ三メートルはあったろうか）から突き出た板の先端まで歩いて水中に落下することであった。死と背中合わせとはまさにこのことだった。下にいる水泳部の先輩の顔が仏様のように見えた。こんな荒業のお蔭でやっと沈まずに泳げるようになった。當時は、「お国のため」に生き、国家の命運は我等若人の双肩にかかっていた時代であった。今だから言えるのかも知れないが、中学時代の思い出にいやなものが出てこないのが不思議なくらいである。真剣にその時代を生き抜いた結果として言えることも知れない。

次の二十年は、大きく言って人生を決め、そして終生の仕事として生徒諸君と共に生きてきた教員時代である。上級学校の進学で先ず頭を打った。終戦後父が病床に倒れ、やっていた仕事もできなくなりおまけに兄弟も多いという中から、どうしても希望が捨て切れず自らの力で生きようとして京都に出て下宿生活を始めた。私が英文科に進むようになったのは、中学時代の恩師に影響されるところが大きかったと思っているが、他にも理由がある。背水の陣であったし、数学の苦手な私は、当時入学試験に数字のないところを探

したという理由もある。新島先生の偉大さを知ったのは同志社に入ってからであつたから。やっとアルバイトを見つけた。当時京都にはアメリカ軍が沢山おり、その専用映画館で夕方から一定時間働くこととなつた。炊事、洗濯、勉強は夜働くものにとつては大変つらかつた。人間関係のむづかしさ、人の心のやさしさ、みにくさをまざまざと見せつけられたのもこの時代であつた。しかし、それが今から思えば人生に役に立つたと思う。睡眠時間五時間足らずの毎日、最後までやり通せたのは気力以外の何ものでもなかつたと思う。しかし、昭和二十六年や々と念願の高校教師になれた。学校の先生になりたかつた夢が実現したのだ。月給四千八百円であつたと覚えている。初めて教壇に立つたのは府立生野高等学校で、最初のクラスは三年生、今でも覚えてるが、両側に男子生徒がおり他の列は五列とも皆女生徒であつた。七才しか違わない私は前を見ても緊張であまり顔が見えなかつた。以来英語の教師として十二年間生野高校でよきにつけ悪しきにつけて足跡を残した。演劇部の顧問もした。おそくまで練習をした生徒を家に送り届け、学校に戻ってバックに絵の具を走らせたこともあつた。三・四人上手な生徒がいて――

そのうち今一人はプロになつてゐるが――内木文英氏作の「祝い日」という作品を手がけ、府下の高校演劇コンクールで優勝した時、生徒と共に涙で抱きあつた感激は忘れられない。若かつたのだなあ。大変世話をやかせた生徒、昼食時塀をのり越えて外出しようとした生徒の足をひっぱつて説教した当のご本人は今私と一番仲よくしてゐる。こんな人生がどこにあるのかと私は胸を張つて自分の職業を誇らしく感じたものだ。やがて昭和三十八年ベビーブームで沢山の高校が誕生した。そのうちに一つの大和川高校があつた。新設校作

りに意欲を燃やしたので私はそこで仕事することとなつた。教務部長として新設校勤務は大変忙がしかつた。日曜日はほとんど返上した。ここで得た教訓は、どれだけ多くの量の仕事も必ず期限内にはなんとしても完成するべしということであつた。「文句を言わずに先ず自分で手をくだしてやってみること」が肝要ではなからうか。しかし、残念ながら一回の卒業生も送り出さずに、二年間という短い期間で大和川高校を去ることになつた。その二年間で私は、やる気のある人の姿の美しさ、一期生として真剣に取り組む生徒のたくましさ、心の美しさに打たれた。離任式のあとで男子生徒数名が私のところへかけ寄つてきて、「先生途中で僕等を放り出さないでほしい。この学校に卒業までおつてほしい」と言つてくれた時、教師でよかったと感謝し、同時にこれで思い切つて離れられると決心がついたのだつた。学校を離れて全く未知の行政の世界へ入ることになつたのである。これで直接生徒と接する機会がなくなると思えば淋しい限りであつたが、気持の通じ合った友達がこんなに沢山いるではないかという自分に言いしかせる自分の声に満足するのであつた。

最後というか、大和川高校を離れた昭和四十年から今日までは第三の区切りとしての行政と管理職の時代である。一口に言つてこの二十年間は「忍」の字を除いては考えられない。私は自分なりに一番大きく成長した時代だと考えてゐる。全く勝手のわからない処で仕事をするのだから不安も大きかつた。当時の大和川高校の校長（竹谷 新氏）に指導主事とはどんな仕事をするのかと尋ねたら、いとも簡単に（氏も長い経験の持主である）「校長を指導すること」だという答であつた。考えても自分にはできそうもないことと一度

はお断りしようと思ったが、辞令もできているとか、男度胸をきめて指導第一課入りとした。当時私の所属した管理係というのは、学校の管理運営の指導、募集人員の策定・選抜等大変重要な仕事が多かった。その時の係長は二代前の本校校長の大倉清先生であった。色々コピーの焼き方から指導を賜ったのである。私が驚いたことには、あれだけ字もよく知っており、あれだけ文章もうまく書けるのに（これは自分の今までの独りよがり）一つ書き上げた原稿（これを「起案」という）をあとかたもないぐらいに朱で訂正されるではないか。自信がなくなった。もう一度学校へ返してもらおうかとさえ思った。しかしよく考えよく読み返してみると、一口の長というが、さすが先輩の訂正は何一つ間違っていないだったのである。誰が読んでも、誤解されることなく同じ解釈がくだせる平易なそして不用の文言のない文になっている。これを知ってようやく自分も前向きになって心がけが変わった。何百人という多人数に対して二三人の担当者で数時間交渉を受けることも回を重ねると要領もわかってくるし、何でも習うより慣れろという言葉はここでも生きていると痛切に感じた。こういう生活が六年続いたあと、三島教育事務所所長代理兼指導課長を昭和四十六年から二年間、次の二年間は知事部局で私学行政を担当した。小中学校行政といい、私学行政といい、私はこの四年間に人間関係の大切さ、そして諸君にはわかりにくいかも知れないが、人脈を知り、それをものにすることとを改めて思い知らされた。これは行政生活十年間の大きな土産であったと思っている。昭和五十年には白菊高校に教頭として、十年のブランクの後学校生活に戻ったのであるが、これからは管理職としての学校生活である。同校で校長となり、今宮高校に転じ、そして昨年四

月本校にお世話になることとなった。本校では来年百周年という大きな行事が控えている。大いに努力しなければと思っている。

歩いてきた道を何の飾り気もなく述べたが、今他の校長諸氏に冗談まじりで自慢しているのは、百七十二校の校長の中で辞令の一番多いのが私ではないかということだ。これぐらいがせいぜい自慢できることだと思う。「石にかじりついて」という第一の人生、大いに教師として誇りと自信をもって頑張った第二の人生、そして今学校の管理職として対外的に多くの仕事を処理しつつ学校の運営に気を配らねばならない忙しい毎日を送っている第三の人生、それぞれ私は大切にしたいと考えている。これを読んで益するところはなかったかも知れないが、諸君に望みたいことは、今日の人生を精一杯生きること、努力せよ、素晴らしい友もできるだけ沢山持て、そしてどんな時でも思い切って失敗を恐れず前向きで頑張れということである。いつも充実した人生がどんなに高価なものであるかを味わってほしいと思う。

五月八日のこと―稲川正義先生―

石川 承 紀 先生

昭和五十九年五月八日、京都府立医科大学に入院加療中であった稲川正義先生が永眠された。五十七歳になったばかりである。胆石と肝炎が原因であると伝えられた。

その日一時限目の授業を終えて教務室に帰ると、何か普段と違う様子を感じられた。事務室寄りの黒板のあるあたりに先生方が集まり、二・三人が小声で話し合ったり、ただ黙って立っていたりする黒板を見ると始業前には見えなかった文字がある。△稲川正義先生

が八日夜半過ぎに逝去された」という内容である。私は「あゝ」と言ったなり、しばらくは身動きもできなかった。

杉岡先生が眼を真っ赤にして立っている。何か言いかかったが、明瞭な言葉にはならなかった。長田先生は、顔をちょっと前へ突き出すようにして、じっと黒板を見ている。眼鏡のレンズがひどく分厚く、濡れているように見えた。渡辺先生が近寄ってきて、何か一言二言話し掛けて部屋を出て行き、またすぐ入って来てうつむき加減でその辺りを歩いている。誰もが、何が起こったかを理解することができず、起こってしまったことを受け止めることができなかった。

稲川先生は四月十八日から欠勤なされたが、休む前には

「念のために、ちょっと入院して検査してきますワ」と笑っておられた。治療の経過が思わしくないということも伝わってきたが、これほど急激に悪くなり、亡くなられるというようなことは思いもしなかった。多少時間が掛かって、やがて元気に教壇に立たれることと信じていた。

稲川正義先生は、昭和二年四月三十日、京都にお生まれになった。京都市立の小学校、私立同志社中学校、京都工業専門学校を経て、昭和二十七年三月、京都大学理学部宇宙物理学科を卒業された。同年四月大阪府立大手前高等学校定時制に赴任され、二十九年四月から大手前高校全日制に移り、以来三十余年にわたって本校に勤務されたのである。現在大手前高校の先生には本校の卒業生が十数人もいらっしゃるが、その方達の多くは稲川先生に生徒として接したことがあるということになる。そのようなこともあってか、稲川先生

は生徒達を指導するだけでなく、先生方の指導者でもあった。

私は七年前に大手前高校に着任し、二年目から稲川先生が主任をなさる学年の担任として先生の指導を受けた。私は小さな学校から移って来たのでわがままな癖が抜けず、稲川先生に随分迷惑を掛けた。私のクラスの生徒が、自習時間に屋上でコーラスの練習をしていた。いかと聞きに来たことがある。大手前のシステムも校舎の構造も頭に入らなかったから、「いいだろう」と許可を出して稲川先生に大あわてをさせた。屋上に勝手に出入りできるような建物でないことには気が付かなかった。

持ち上がって二年生の係になると、渡辺先生が自治会顧問、長田先生と私とが学芸部ということとで皆二年生の担当であり、稲川先生の学年で文化祭その他の行事の指導をする形になった。いつものことではあるが、稲川先生は八時前には登校し、六時すぎまで帰宅するということはない。文化祭の準備が忙しくなったころや文化祭当日、先生はいつの間にか一番忙しい場所に来てくれた。ただ黙って坐ってくれているだけで、慣れない私にはありがたかった。我々の仕事が遅くなっても、稲川先生が先に帰るようなことはなかった。私達が仕事の上で行き詰まったり、疲れているのを見ると、「ソバでも食べて帰りましょうか」とねぎらってくれた。その日の仕事の復習やうまくいかなかったことの整理は、そんな場面で話題になった。学年の仕事などで、我ながらうまくないと思うようなことがあっても、私達が汗を流して仕事をしている限り、稲川先生は大変寛容であった。あの大きな目を細くして「ワッハッハ」といかにも愉快そうに笑い、そして自分自身で体を動かして問題が解決するように動いてくれた。どこまでも懐が広く深いことを感じさせた。

初夏の川風を受けて一緒に淀川べりを歩くと、アロハ風にズボンから出した先生のシャツの裾が川風に翻った。先生の明るい笑い声が川面を渡る。あの笑い声をもう一度聞きたいと、今、思う。

三年間指導した学年の諸君が卒業すると、私は体に故障を覚えて一年間いろいろの仕事を除くことになった。この年から大阪府全体の教育環境がきわめて悪くなり、大手前高校でも、経験豊かな、学校の中心となる先生方の人事を中心として、地すべりのような変動が起こった。数学・英語・理科などから、大手前を長く守り育てた先生方が多く去って行った。その余波を受けて、稲川先生も一年生からではなく、二年生の主任として再び激務につかれた。五十七年度と五十八年度、最後の学年主任を務められたわけだが、この二年間は、大手前高校の、冬の時代への入口を思わせる時であった。先生方の人事の問題、狭い校地への学級増の問題、教育予算の削減の問題、様々のことが百年の歴史を誇る大手前高校をじわじわと締め付けてきた。どんなことでも受け止めて、うまく処置してくれた稲川先生も、時にイライラした表情を見せるようになり、あの明るい笑い声を聞くことは少なくなった。

昭和五十九年は、大手前高校にとって不幸な年であった。小野先生が前年末から長く入院された。三月には新たに一年生の学年主任になった平野先生も、入学式を前に入院された。七月には、二十余年にわたって大手前高校の給食部の世話をされた坂田さんが、胆石・肝炎で亡くなられた。私事で恐縮だが、六月、文化祭の直前に私の父が胆石と肝炎で入院、容態は急変して私達兄弟に召集がかかった。父はなんとかもちなおしたが、しばらくは稲川先生と同じ経過

を辿った。

その年、五十九年の初めから、健康を誇った稲川先生の体調にかげりが生じた。体重が減り、顔色が少し灰色がかった見えた。それでも稲川先生は早朝出勤、遅くに下校を続けられ、三年生学年主任の激務をこなしてゆかれた。四月になり五十九年度に入ると、難しい時代に大手前高校全体のより優れた将来像を描くために、教頭先生と相談されて進路指導部長になられた。本校の学習指導、進路指導の中枢となるべき進路指導資料室（資料室）は先生が計画されたもので、稲川先生の遺産ともいうべきものである。

現在私は二十年十組の担任であるが、五十九年四月段階で、稲川先生は十組の数学全部、六時間を担当して下さった。クラスの生徒達から稲川先生の評判を聞いた。「稲川先生は最初とても恐かった。でも、説明が分かり易いし、数学を勉強しなければならなかったがよく分かったから、今一所懸命勉強しています。先生に教えていただいてうれしい」と異口同音に答えた。御病気の重いことを知った私は、直接見舞うことを遠慮し、手紙で私と生徒達の感謝と、御本復の早いことを願う気持ちを書き送ったが、時機を失して、先生に読んでいただくことはなかったようである。そのことが残念なこととして今も私の心に残っている。

お通夜の席に待ろうと御宅まで伺った。京阪の駅でも、行く道でも帰る道でも多くの旧い知人に会った。御宅の前は数百人の参列者で埋まっていた。突然の訃報に接した人達が、他のすべての予定をなげうって駆け付けけたものである。真実の深い悲しみと驚きとが夜の人垣を覆っていた。

五月八日朝、大手前高校を襲った衝撃は、時間とともに、重く沈んでいった。私は自分の席で書類を開いたり、辞書を繰ってみたりしたが、集中することはできなかった。落ち着かなくて教務室の中を歩く。一番南側の列に稲川先生の机がある。机の上には、いつも珍しい外国の煙草があった。今にも授業から帰って来て一本くゆらすかと思える。次の列のとっかかりに、小野先生が坐っていた。私は黙って隣に腰を下ろした。見てみると、何人かの人の名を書いてあるようにもあり、無意味に手を動かしているだけのようでもある。私が見ていることに気付いているようだが、こちらを見ない。やがて私の方へ椅子を回して、

「知らせる人の名を書いているのが、仕事の手につかんでなあ」と言う。肩を落とした小野先生が一まわり小さく見えた。

数学科からはこの数年、多くの先生方が他に転じて行かれた。香川先生、須崎先生、多賀谷先生、野村先生、井手先生、平瀬先生、広田先生、皆学校の重要な仕事をして去ってゆかれた。そして五十九年度に入ると、数学科で四十歳以上の先生は、稲川先生と小野先生の二人が残っただけである。先生方はそれぞれの校務を担当なさるのであるが、私の知る限り、稲川先生と小野先生はたいいていつでも一緒に学年主任をしていた。お二人の学年についての方法がそっくり同じというのではないが、求める完成度の高さや、一つ一つのこと自分で手を入れて緻密に指導するやり方は共通部分が多く、それが大手前らしい校風を作る一つの大きな要因になっているとは思っていた。

小野先生は、ゆっくりと顔を上げて私を見た。

「石川さん、これから誰と話をしなればええのや」長い間協力

し、支えあってきた一方の柱が突然消え失せたことへの思いを、そのような言葉に託された。永年の僚友を思いもかけぬ形で失ったことは、小野先生の内側の深い部分に重い一撃を加えたようであった。先生は私の顔からわずかに視線をそらした。私も直視することができずに目を伏せた。お互いに言葉を交わすこともできずに、しばらく熱いものに耐えていた。

腕白小僧とその父

近松 淳一 先生

昼のかけらのような光を少し残し、灰色がかった暗さのある十二月の夕暮刻の事であった。玄関に「ごめん」と言うしわがれたドスのきいた声が聞こえてきたが、何んだかこの時代の世相にふさわしい感じがした。それは昭和初期の不況の嵐が日本全土に吹きまわっていた深刻な時代であった。

腕白小僧の私が玄関に出てみたが、その人の目は鋭く、髪の毛は余り無く、僅かの毛が白く、ひどく疲れているように見受けられた。子供心に何とこわい人、不気味な人と云う感じがして足が震えていた。

「住職さんにお会いし度い」と言うので早速父に報告し、応対してもらった。心配になり隣部屋より話の模様を聞いてみると、その人は数年前の正月、喧嘩の原因もないのに唯酒の勢いで、従兄を刺殺し、綱走刑務所に入獄、獄中何回も悪夢に悩まされた。供養の高読経してもらいたいとの事であった。父は早速本堂でお経をあげていた。その後その人は何度も何度も足を運び父と対話をし、親しさも増してゆき、表情も穏やかさが加わり、不思議な事に頭髮にも

黒さがまじってきた。父の臨終にも立ち合い、肩を落としてとめどなく溢れる涙が未だ私の脳裡から消えない。父がいつも云う「人間は不幸な人こそ大切にしなければいけないよ」と腕白小僧に聞かせてくれた言葉が十二月の暮になると再度思い出される。

腕白小僧の五、六才の時、石垣にいた小蛇を子供同志でいじめていた。その姿を見た父はその夜、私をひどく叱責し食事を与えてくれなかった。それ以後寺の境内の蟬、蜻蛉捕り等は一切しなくなった。又或る人が土産として私に籠に入れた山鳩をくれたところ、父は殷懃に礼を述べ、帰られてから「鳩は山や里が故郷である。こんな籠に入られたらさぞ不自由な事であろう。若しお前も入れられたらどうだ。一つ手離してやらんか」と、惜しい玩具を失うようで心の中は不満で一杯であったが籠を開けてやった。鳩は羽ばたきをしなから、境内を大きく回転しながら飛んで行った。鳩が何んだか喜んで有難う有難うと云っているような思いがして不満も消え愉快になった事も昨日のように思われる。

或る夏の夕暮境内の草むしりを父としていた時に、父が土塀の屋根瓦に寝ている蛇をみて「人間と同じで昼寝をしているんだ。目を覚ましたら大きな欠伸をするぜ」と、果してその通りであった。

「蛇も仲々可愛いものだろう」と言った気持には今もって仲々なれない事に反省をしている。父の心には絶えず無益な殺生を戒めると共に「ほろほろと鳴く山鳩の声聞けば父かとぞ思う、母かとぞ思う」と幼い頃に両親に早く死別した事が、このような気持を絶えず動かして居ったのであろう。又生きとし生ける物の縦糸、横糸の縁を大切にしていたと思われる。父についての思い出は数限りがない。ほんの一端を述べたに過ぎない。父のような心の持主になり度いと努力はしているが仲々到達出来ない。懸差の限りです。

最後に一つ笑ってもらおう腕白小僧の失敗話を記しましょう。

「からめては女房のふせぐ大三十日」と川柳にもよまれている。十二月三十一日は子供の頃の貧乏人にとっては大変な一日であった。一年の終末であり、来年へのスタートでもあり、民俗学的にも色々な行事が残って居り、有意義な日である。元禄期の西鶴の「世間胸算用」は一年間の収支決算日に当り、いわゆる借金払いや、又借金とりに追われる苦難の有様や、人間らしく生き度いと云う必死のあせりを的確に把えている。現在のような紅白歌合戦を見ながら過ごす云う時代はなく、一家のあるじは経済上の攻防の激しい大変な一夜であった。その夜は長く亦短かく、明るく亦暗らく感じた色々な人間像が展開された事でしよう。

我が家では母はいないが、役僧や大阪弁で云うおとし、おなごし等が多くいて、父一人が応接し四苦八苦していた。現在は買物は現金払いであるが、未だ昭和初期は信用貸しも多く残っていた。当時は大節季と呼んでいた。しかし除夜の鐘が鳴ると借金も翌年廻しと云う慣しになっていったようである。払えない人にとっては除夜の鐘は百八の煩惱を取り除くばかりでなく、救いの神でもあった。父の苦しさを見て、その苦しさを早く切り抜けるにはと腕白小僧は思いつきで少し早い寺の境内にある鐘撞堂に昇り、鐘を撞き始めた。ゴーンゴーンと鐘の音は寒い夜を包んでしまう。近所の人々が早い鐘に驚き右往左往して居った事や、父の微笑していた顔が。

毎年除夜の鐘が聞えてくるとやんちゃであった頃の事が今は笑いとなって心に帰ってき、かすかながらの哀愁をとまなってくる。そして新しい年を迎える我が家の行事。本堂、御内仏、春日神社（境内にあり）での読経、それが終って、みんなで一緒にお雑煮を頂く。丁度それはいつも夜明けの四時頃であった。

自治会功労賞

平 正 人 先生

昨春、教員免許状を必要として、家探しをした。目指す物が出てこないで、小学校から大学までの卒業証書、成績表、合格通知等が、教科書類と一緒に整理して収められた段ボール箱が見付かった。私に自覚がないのだから、だれか、多分、亡くなった母がやってくれたのであろう。懐かしんで目を通して見ると、旧制第四高等学校の卒業証書とともに、自治会功労賞なるものが見付かった。

所属した野球部は弱かった。というより、相手校を見つけ難い事情があつて、練習を思い出したように繰返した。文芸部にもいた。部誌「北辰」は由緒あるもので、中野重治等の作家が輩出したという。現に、四人の編集委員の一人、高橋治君は、昨年の直木賞を受賞した。顧問が、後の東大独文教授西義之先生で、今は評論家の小松伸六ドイツ語教官にも、助言をいただいたと思う。しかし、私は編集にたずさわっただけで、原稿は「ボツ」になった。部活動では、いづれにしろ、功労賞に値しない。

母の法事に来阪した弟（なげか、私は四つ年下の弟と同級であつた）が、「お前、茶寮の委員だったろう。」と思ひ出させてくれた。茶寮というのは、大手前の金蘭会館にあたる。寮の管理と、一階の食堂と給品部の運営が委員の仕事である。食糧難の時代で、自宅通学生と校内の寮生以外は、三度の食事に苦労した。そこで、米穀通

帳の外食券を利用し、多少のヤミ物資を入手して、自治会が直営食堂を開設した。私は、言ってみれば、食べるために、洪々委員に加わったにすぎなかった。実態は、部室を恰好の休息場所と心得て、とぐるを巻いて雑談に耽り、退屈すると悪戯を考えていた。英語教官梶圭之助先生が着任されたが、住宅難でもあり、茶寮に並んだ校舎の一室に、御家族と暮された。委員達は、先生の姿を見かけると、「梶だ！ 火事だ！」を連呼して、先生や御家族の反応を見て、たのしんだ。

催物を企画した。当時好評だった映画「青い山脈」の今井正監督とニュースター杉葉子さんを、茶寮二階大広間に招いて、座談会をした。監督よりもキャンペーンに時間をかけた杉さんを、私は階段下で出迎えた。この階段はおそろしく汚いのには、「土足厳禁」の貼紙がある。彼女がこれに気付かなかつたらどうするかを委員が賭けた。「靴を脱げ」と私が怒鳴った。「すみません」と彼女は素直に従った。私の名は全校に轟いた。（私の怒鳴り聲はこの成功に由来しているらしい）諏訪根白子ヴァイオリンコンサートでも、しくじった。入場券を多く売りすぎた。入場出来なかつた聴衆のため、翌日の昼、諏訪さんの市内見物の時間を割愛して再演をお願いした。ところが、週日の昼というので、八百人も入る講堂に集つたのは、十数人の生徒と委員だけ。悄気していると、「小人数の方が雰囲気がいいのよ」と諏訪さんは、プログラム以上に演奏して下さった。この時のアンコール曲、ドビッシの「海」は、生涯、私の右脳の宝物である。教官の講義用ノートを借りて、生徒用のプリントを販売したのは、双方に好調であつた。だが、調子に乗りすぎた。経営にゆとりをと、近くの女子大の英語テキストの虎の巻をアングラ出版

した。折悪しく福井大地震に見舞れ、仕事場が崩れて、学校の知るところとなった。生徒部長にたつぷり叱られた。

同じ頃、鈴木健二氏は、弘前高校全寮委員長として、献身された。その折りの「気配り」が、今日の高名なアナウンサーを生んだ。私は委員として食べ、悪戯し、失敗し、卒業後は忘れたいと願ひ、思ひ出せなくなっていた。それでも、賞状を前に、懐かしく、嬉しい。

ふと、振り返って想うこと

三宅恵子先生

私が高校に入学したのは、ちょうど十年前の昭和五十年でした。母校は大阪府下の進学校で、入学した時から大学受験の話を聞かされました。教科書以外に参考書が自習課題として試験範囲に入り、その量の多さに入学当時は驚いたものです。私は家が遠かったので部活動には参加せず、毎日学校から帰ると勉強をし、夕食をとり、お風呂に入って寝るという生活の繰り返しでした。勉強するのは嫌でしたが、大学に入るのに必要ならば仕方がないと思っていました。私の高校時代は、可もなく不可もなく大した思い出もなくあつという間に過ぎてしまいました。(少なくとも本人はそう思っていました。しかし、大学に入ってから数多くの事を体験できましたから、高校時代が暗かったとか、青春がなかったとか思っていたわけではありませんが。

昨年の正月二日に高校二年生のときのクラス会がありました。卒業後数年間にいろいろな経験を大きく成長したクラスメートたちの話は、どれも興味深く楽しいものでした、幹事をしてくれた人は、

(高校時代、私は彼のことを堅物だと思っていました。)東京の大学を卒業後商社会社に就職し、毎日接待につぐ接待だそうで、すっかり社交的になりなかなか堂に入った司会ぶりでした。酒をついで回る手慣れた仕草に、感心しつつもおかしくて笑ってしまいました。それぞれの近況報告を聞いてみると、すでに二児のママになっている人を筆頭に結婚している人が数名いました。一度入った大学をやめて医学部へ入り現在五回生だという人もいました。お互いの近況報告から話はしだいに高校時代の思い出へと移って行き、鬼と呼ばれていた先生のこと、授業中であてられて答えられずいやみを言われたこと、苦しかった試験のこと、楽しかった修学旅行のこと、体育祭で頑張ったことなど、クラスメートたちと話していると、大した思い出もなかったはずの自分の高校時代がありありとよみがえってきて新発見をしたような気持ちになりました。本当に楽しいひとときで、クラスメートというのはいいものだなあとつくづく感じました。お互い素性は知れているのだから今さら格好つける必要もないし、また現在何の利害関係もない間柄だからざくばらんに何でも言えます。男女を越えてわいわい騒いで、あつという間に時間が過ぎてしまいました。

私は今まで平凡な人生を送ってきたと思います。それは、特別小説のような出来事がなかったという意味でもあるし、毎日毎日あまり大切に扱っていなかったという意味でもあります。それなのにふと振り返って考えてみると、小さな喜びや悲しみが積み重なって多くの思い出が出来ていました。素敵な友人にも恵まれました。今、過去を振り返って楽しかったことを思い出せる自分を幸せに思うとともに、二十五年間の人生を改めて実感したような気がします。

文芸

河畔狂想

三年二組 長井道則

河風が土手を駆けぬけて

黄色い黄の葉が舞い落ちました。

河は小さな波をたてながら

静かに目の前を行きすぎます。

そのひとは私と同じようにうつむいたまま

河の流れを見つめていました。

そのひとの長い黒髪が

河風に美しくなびいています。

美しく、たまらなく美しく……

私は何か言うでもなく、手をとるでもなく、
ただ河の流れを見つめるばかり

でも、それで十分なのです。

心のひびが埋められていくようで

(それは所詮自己満足というものにすぎないぞ)

河風が土手を駆けぬけて

木の葉がまた舞い落ちました。

草野球のかけ声が向う岸から聞こえてきます。

無邪気な子供達が目の前を駆けすぎました。

そのひとは何か思いつめたように

やっぱり黙ってうつむいたままでした。

私はどこかたじろぐような心持ちで

やっぱり黙って河を見つめています。

そのひとはふと目を上げて

信念のこもったようなその目を上げて

——「時代」などという言葉に酔い痴れたくはない——

私は思わずうなずきました。

—— 巷に聞こえる恋歌のような、

「愛」という言葉の大安売りはいやだ——

(貴様の如き青二才に、

そんな偉そうなことが言えるのかよ！)

それでも、映画のようなキザなセリフはいやだ！

(そんな甘っちょろい幻想にばかりひたって

貴様それでも男か！)

……ふと気がつく

私はひとり土手の上にたたずんでいるばかり

そのひとはもう私のそばにはいないのだ

それとも初めからみんなまぼろしだったのか……

(おまえはたわいない夢から醒めて

この大地をしっかり踏みしめねばならない)

……ああ、私は私自身で立たねばならないのだ！

河だけは何も知らずに

あるいはすべてを知っているように流れてゆきます。

かくて私は土手の上を歩き出し

河は黙々と私を追い越してゆきました。

ドラマテイク・ショット

三年五組 森田吉公

「よし、そこでぐるっと回って。」僕は、ファインダーの中で笑っている妖精——僕の妹、美亜に言った。

「これでいい？お兄ちゃん。」澄んだ声が草原の風に乗る。

「ちょっと固いな。もっと滑らかに。いいぞ、その調子。よし、

OK。終わりにしよう。」美亜が駆け寄ってきて、僕の腕に飛びつく。

「お兄ちゃん、きれいに撮ってくれた？」

「お兄ちゃんが今まで美亜をきれいに撮らなかつたことがあるかい？

今度も素晴らしい出来だよ。」

「本当？ありがとう、お兄ちゃん！」そして、美亜の笑顔が僕の視

界いっぱい広がついていった……

——ん？あ、朝か。また美亜の夢を見ちゃったな。あいつが交通事

故で逝っちまってもう三年にもなるってのに。お、何だ、この枕元

の雑誌は？あ、そーか、昨夜引っ張り出して見てたんだっけ。学生

カメラマン沖田昇、金賞受賞——作品「緑は萌えて」か。大昔だな。

思えば美亜の写ってるやつは、これが最後だったんだ。美亜が死ん

でから、僕は風景しか撮らなくなった。ま、それはさておき、大学

にでも行くかな。その前にこのどうしようもなく散らかった部屋を

何とかしないとだめか。しゃーねえ、掃除でも……あれ？鍵が開く音

だ。ここの鍵持ってるのは、僕と管理人のおっさんと後は……

「昇、いるんだろ？何だよこの部屋。目茶苦茶じゃない。たった三

日でよくこんなに見えるね。掃除してやるからさ、その辺ブラつい

てきなよ。」彼女は中学からずっと一緒に坂井宏美。時々こうして掃除に来てくれたり、飯食わせてくれたりする。宏美の笑い声聞くと心がなごむんだ。だけど、別に恋人同士ってわけじゃない。この間一緒に飲んだ時、誰か好きな男がいるみたいなこと言ってたし。

「昼飯作ったげるから、昼前には戻れよな。」はい、はい。邪魔にならないよう退散しましょう。駅前の本屋にでも行くか。

最初に手が伸びるのは、やっぱり写真雑誌。適当にページを繰っていた手がピタッと止まった。そこには、カナディアン・ロッキーが写っていた。カナダ・美亜が一番行きたくてたところだ。僕が撮る風景は、みんな美亜が行きたがっていたところ。奥入瀬、軽井沢飛鳥、嵯峨野……。以前から僕の心の中でくすぶっていた計画が一気に燃え上がった。

「昇、休学届出したって本当なの？」明るく日、僕が旅仕度を終えたところに、宏美が飛び込んできた。

「ああ、ちょっとカナダまで写真撮りに行くんだ。美亜が一番行きたくてたところなんだぜ。」気のせいかな、宏美が寂しそうな表情を一瞬見せた。しかし、すぐ消えてしまった。

「……そうか、元気で帰っておいでよね。手紙ぐらい書きなよ。じゃあね！」泣き笑いたいような表情を残して宏美は出て行った。こんな僕のことでも少しは心配してくれる人がいるってことだろうか……。

そして今、僕は空港のロビーにいる。

「大和航空、バンクーバー行七〇五便に御搭乗の御客様は、九番ゲートより……」あ、僕の乗るやつ。さて、見送りのないし、一度と戻らぬ日本に別れを告げるか。グッバイ！

「おい昇！一人でキメようとするんじゃない！」あれ、宏美。見送

りに来てくれたのかな。

「残念ながら、見送りじゃないのよ、昇。」そう言って、宏美が何かを取り出して見せた。えっ？あれ、ひょっとしてパスポートとビザじゃ……。

「僕もね、行・く・の！」

「ちょっと待てよ、冗談じゃない。僕が撮影旅行に行く時は一人っきりだっての知ってるだろ！」と、宏美の顔から笑みが消えた。

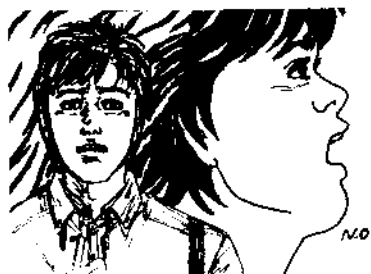
「嘘だ！」何？

「昇は、いつも美亜ちゃんと二人で出掛けてるんだ！」

「宏美、一体何を……」

「僕にはわかってたよ。君の撮る風景の写真には、いつも美亜ちゃんも写ってたんだ。他の人には見えなかったけどね！」

僕は呆然として宏美の声を聞いていた。宏美の言ったのは、どうやら凶星だったらしい。自分でも気付かなかったけど、いや、気付きたくなかったからかもしれないが、僕が覗くフライングにはいつも美亜がいた。



「だけど、そんなことしてもだめだよ。前みたいな美亜ちゃんの写真、撮れてない筈さ！」そう、僕がどんなに苦心しても、妖精のように舞っていた美亜のイメージは、一度と撮れなかった。

「昇、昇はカナダで死ぬ気なんだろ。」これも凶星だ。

「僕にはわかるんだ。美亜ちゃんの前で死んでいた土地で、昇は死ぬつもりだってね。」

「だったらどうだっていうんだ！宏美には関係ないこと……」

「関係なくない！」辺りの人が振り向くような大きな声だった。

「僕はさ、僕は昇の撮った美亜ちゃんの写真、とても好きだったよ。でも、今の昇の写真は好きじゃない！」

涙？僕の前で初めて宏美が泣いている。

「……どうして？どうして美亜ちゃんが死んじゃってからまで美亜ちゃんを撮らなきゃならないの？僕は昔の昇の写真、好きだけどさ、昇の、昇のことだって好きだったんだから！」

「宏美……」

「なのにさ、なのに昇はいつだって美亜ちゃんばかり見てた。僕を見てよ！僕にカメラを向けてよ！僕のこと、写してよ！」

宏美が僕の胸に倒れ込んだ。

「美亜……」

宏美の顔に、美亜のそれがグブった。

「宏美さんは素敵な女よ。泣かせたりしちゃだめよ、お兄ちゃん。」
忘れもしない美亜の声。そして、妖精のような微笑。
そして消えてしまった美亜。

僕の腕の中にいるのは、美亜ではない。

「宏美、前に北海道の牧場に行ってみたって言ってたよな。」

「うん、言った。だけど、それが？」

「OK。今度の撮影旅行の目的地は北海道に決まりだ！」

「えっ？」

「もう美亜はいないよ。ここに居るのは宏美だ。」

「昇……」宏美は目を閉じた。僕も目を閉じると……あっ！

「いけね！早くこの切符キャンセルしてもらわなきゃ。」

「あ、僕もだよ。」

宏美の顔に笑みが戻った。カシヤツ。僕は心の中でシャッターを押した。いい顔してた。僕が撮った、最初の宏美。いつまでも心に焼き付けておくつもりだ。

「行こう！」

僕は、手をつないで空港のロビーを駆け抜けていった。

たまゆら……

三年六組 森 永 明 治

——輪廻転生——

すべてのたましいは、移りめぐり永久にほろびることがないという。来世であなたがもう一度人間に生まれかわるとは、誰が断言できようか……。

実力テストが返ってきた。そこに一縷の望みもなかった。冷淡な教師の目が私をにらむ。そして、答案用紙がまるで「おまえなんかくずだ！役立たず！」というふうに見えるみたいだった。どうせ私はゴミですよ。火曜日に玄関先に出されて江東区にうめられるんだ。そうしたら腐敗してメタンを発生して、そのメタンが細い管を通って地上にでる……。空しい、なんて空しいんだろ、そうだ、そうになったら、生ごみと団結して巨大な炎になってやる。そして日本列島を火の海にしてやる！

翌日私は、希望通りに、生ごみになって、玄関先に出されていた。

しかし、運の悪いことに形はまだ人間だった。青いポリ袋の中で、私は考えた。いづれ土と同化して江東区の地盤になるのだ、そうすればもう誰も私のことを役立たずなんていえまい……。

ところが、又運の悪いことに、私はゴミの中から取り出された。「こいつは高く売れるぜえ、へっへっへ。」

勘違いしないでいただきたいのだが、現在は、食料危機で闇で人肉も取引きされているのだ。彼らにとって味は、問題外にしろ、油ののりきった私は、好都合であったのだ。私は、要冷蔵のマーク入りのダンボール箱につめられて、トラックにのせられ、ひとまず、冷凍庫の中に運ばれた。そして、今、好き嫌いの激しい私の、就中嫌いな脂肪分の多い肉にされようとしている。

気がつくとは私は、肉屋にいた。

ふたの腸づめウインナー、ミンチ、牛肉（であるはずもない）として店先で特売にされていた。

その中の一つを、友人のKが、買っていった。

「久しぶりのお肉、それも、し・も・ふ・り・だぜえ、るんるん。」

阿呆、これが私ともしらずに、お前も肉となつて、特売に、されればいいんだ。

私の體の一部は、Kの食卓の上にあつた。私はステーキとして、ミックスベジタブルと共にならんでいた。ば、莫迦、……。運命は私に反駁の余地さえ残してくれなかった。私は、奴の齒でかみくだかれ、だ液と共にのみこまれ、胃の中におちた。他の私もこうして少くとも、口にはこぼれていった。数時間後には、とうとう私も奴の排泄物になるのか……。おお！なんという悲劇、なんという不幸……。

気がつくとは私は、まだゴミ袋の中にいた。まだ玄関先にいた。母の音がする。

「なに莫迦なことやってんのよ。でてらっしゃい、そんなことしても、おこづかいあげてあげないわよ。」

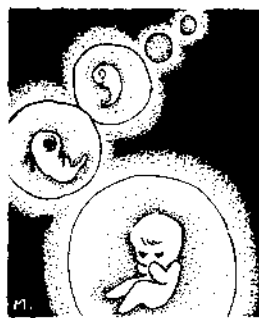
私は、思わず彼女に問い返した。

「母さん、今晚のおかず何？」

彼女は、にやっと笑っていった。

「ステーキよ、特売だったの。」

魂が移り変わる、いろいろな物に……。もし、魂が移らずに、その體だけが、変態していったなら、人は、どんなにか、人間の愚さに気付くであろう。もし、もう一度、人間に変態できたなら……。



New Yorking

三年八組 小阪 淳

デューク・エリントンの『A列車で行こう』で有名になった、落書きだらけの地下鉄に乗ると、セントラルパークの北に在るハールムという町に着く。ニューヨークでは最も広い町で、人口の大半を黒人が占めている。アパートの隅に転がっている、空になったウィスキーのビンですら、この町を雄弁に語ることができる——そんな色の濃い町である。

この町に来て三年程になる。日本にも、ビリー・ジョエルやボブ・ジュームス等が、いつもラジオからN・Yを流してくれていたマイルス・デイビスも、世界で最も巨大なこの都市の、高層ビルに

隠れてしまった歴史を伝えてくれていたような気がする。僕がそれらを素直に受け入れることが出来たのは、今だに自分が日本人であることを自覚したことがないからだろう。

南へ下ろう。……理由となった物憂さは、その日に限って感じたことではなかった。この町の、うんざりする程の色濃さ、そして心で描いていたものとのギャップ。ファンクを体で感じたいと思っていたはずなのに、いつしかそれを煩らわしいと感じるようになっていた。僕は五番街を避けて、タイムズ・スクエアに向った。五番街を歩くのは心地良いが、その華やかさが疎外感を増すこともあったからだ。

タイムズ・スクエアに入ると、僕は電話をかけた。昔と変わらない、少しハスキーな声。僕は彼女に、ここまで出てきてほしいとだけ伝えと、すぐに電話を切った。目的は違ったが、彼女もN・Yに憧れて、僕と一緒に日本を出た。しかし、いつの頃からか、僕は次第に会うことを避けだした。日本を意識しない為だった。

久しぶりに見る彼女は、少し大人になり、そして、昔にはなかった洗練された美しさを持っていた。

「元氣そうだな。」

間の抜けた言葉だったが、何か話しかけないと、僕に気付かずに通り過ぎてしまう様な気がした。彼女は、走って来たのであろう、息をきらしながら言った。

「飲みに行きましょう……。そのつもりなんですよ。」



少し焦点の定まらない僕の目を見て不思議に思ったらしい。僕は微かにうなづいて、ゆっくりと歩き始めた。僕等はそれからあまり喋らなかつた。こんなふうに歩くのは嫌いではない——そう思ったのは、彼女が日本人だからだろう。

「このクラブ、来たことがあるわ。」

彼女がそう言うまで気が付かなかったが、僕にも見覚えのある場所だった。僕はなるべくピアノの見えるテーブルを選んだ。オーダ―を終えた後もあまり言葉は交わさなかった。せめて彼女という時ぐらひは、無理に話はしたくなかつたし、彼女もそれを察してか、言葉をかけてくることはなかった。

彼女を見つめながらピアノを聴いていた。昔、彼女を愛していたことがあった。今も愛しているのかもしれない。問題は、僕が懐いている愛情の対象が、必ずしも彼女だけではなかったことだった。或いは、彼女が日本人だからなのかもしれない。

ピアノが聞こえていた。視線を感じたのか、彼女は頭を持ち上げて僕を見た。いつか見たことのある目——彼女が、まだ僕に好意をもっていてくれたのは嬉しかったが、僕は、ピアノに目を移した。ピアノが聞こえていた。どこかで聴いたことのあるフレーズ。

「この曲……思い出したわ……。あなたと初めて来たクラブね。」
曲がスローなせいもあってか、彼女は落ち着いた声でそう言った。
「あの頃は君が羨やましかった。君を見てると、何でも出来そうな気がしたよ。」

……それなら、どうして私を愛せなかったの……彼女はそう思ったに違いない。彼女は少し間をおいて、こう言った。

「私を触発してくれていたのは、あなただった……。」

「偏差値って少ないほうがいいんでしょう。」とおばさん 僕を慰めないで下さい

彼女は微笑んだ。

クラブを出ると、空はまだ夕暮れの色を残していた。昼間は重くのしかかっていたコンクリートの塊が、いつしか星の柱となり、中間色で染められた空と絶妙な調和をなしていた。タイムズ・スクエアもネオンを光らせて、一層はなやかさを増した。少し寒かったが彼女の足どりはしっかりしていた。……すっかりニューヨークカーだね……口の中で、そう呟いた。

「ハーレムはどう？」

彼女がこう言ったのは不自然なことではなかったが、僕には返す言葉がなかった。何を言っても嘘になるような気がしたからだ。

「私、時々感じることもあるの。このN・Yが、あなたと日本で語り合っていた頃のN・Yではないって。」

少し意外に感じた。頭はボンヤリしていたが、聴覚だけは、なぜか冴えていて、町のノイズの出所を探っていた。一つを探り当てるともう一度始めからやりなおす——それを何度も繰り返してた。

夜は完全にこの町を包んでいた。突然、彼女は近くにあった、アクセサリーショップの入口に続く階段を駆け上った。そして振り返り、目を細めてしばらく遠くを見つめると、物憂げに叫んだ。

「この町は何もかも自由ね。でも人の心はN・Yでも、日本でも自由だったはず……。だれも束縛なんか出来やしなわ。」

微かに残響があった。……そうだね……僕は少しうなずいてから、ゆっくりと言った。

「ありがとう……。」

風のせいかな、彼女の髪が翻った。

彼女をアパートまで送ることにした。混沌としたものは残ってい

たが、街のノイズも風も心地良かった。ハーレムへの憧れも、求めていた感覚も、もうすぐ僕の心の中に戻ってくることは分かっていた。なぜなら、N・Yが最も素敵に見えたのは、日本から彼女と見つめていた時だったことを思い出したからだ。

感傷旅行

三年十組 景山将系

そこは一昔前の僕好みの客車だった。木製の床、壁、椅子。そして列車の出す振動、音。思い出したように鳴る汽笛。何もかもが親しみを感じ、心を穏やかにさせる物であった。

しかし今度の旅は、それらを楽しむ事は出来なかった。しようと思っても、何故か腕を窓枠にかけ、首を傾けて真暗で何も見えない外を見てしまうのだった。

何故か……。いや、理由は判っている。

今度の旅の目的は高校三年間のいろいろな出来事——クラブや勉強に対する希望、挫折や友人との反目、和解の繰り返しや失恋など——を忘れる為だった。

確か三年前にも同じ事をしたんだ。中学時代のいやな出来事、例えば苛めっ子に苛められた事を忘れる為だったけど、今回とは違いえらく明るい旅ですぐ旅の楽しさのおかげで忘れることが出来たのに、今回はますます深く考え込み、そして窓の外を見てしまうのだった。そして、そんな時だった。いつの間にか僕の前に坐った老人が僕に声をかけたのは。

「学生さんや。何故外ばかり見てなさる。あんな闇ばかり見えて

もなんも面白い事はないじゃろ。……それとも何か深い理由でもあるのかね……」

僕は軽く頷いた。

「そうか……もしよければこのわしに話して下さいませんか。もしかすれば力になれるかもしれん」

僕は、別に話す必要はないと思ったけど、その老人の声があまりに優しいので、思わず先刻の事を話した。しかし、顔は外へ向けたままで。

「ああ、そうじゃったか。それはつらい事を言わせたの。しかし、それならわしにも一つだけしてやれる事がある。いいものがあるんじゃない。それを学生さんに見せてあげよう」

この台詞で、始めて僕は老人の方を見た。思った通り、その顔は声と同じくやさしい顔をしていた。

「いいものって？」

僕は老人の言ったことに大変興味を持って尋ねた。

「はは、何じゃろ。そのうち判る」

老人はこう言うのと、まったく違う事を話した。こうして僕とその老人は長い間、話をした。

気が付くともう朝だった。いつの間にか眠ってしまったらしい。

ふと前を見ると、そこには誰もいなかった。たぶんあの老人は何処かで降りたんだろう。しかし、それではあのいいものを見せてあげよう、という約束はどうするんだろう。まあいいや、そんなこと。

僕はこう思うと、何げなく外を見た。

列車は停車、停車して、停車して……いた、が……。



僕は右手で目をこすると、もう一度、よく見た。やはりそれは目の前に広がっていた。

そのとき、通路を車掌さんが通ったので、僕は勢い込んで尋ねた。

「車掌さん。いったいここは何処ですか。」

どうしてこんな処で停車してるんですか？」

「ここって？ ここは駅ですよ。だから停車してるんですよ」

「ええ、かまいませんよ。駅なんですから」

こう答えると、車掌さんは何を当り前な事をきくんだろうというふうな顔つきで向こうへ行行った。

僕はデッキまで行くと、身を乗り出した。そこはプラットホームではなく、見渡す限り花が咲き、その上にたくさんの綺麗な色の蝶や小鳥が飛び交っていた。そして、五十メートル程先に、朝の光が反射してきらきらと輝いている小川があった、それがどこまでも流れていた。

僕は念の為 反対側も見たが同じだった。何てそこは素晴らしい場所なんだろう。地球上にこんな処があるなんて。空は雲と太陽のせいで、青とも白とも赤とも判らない、それらが混じったような混じらないような、それらのどの色でもないような色で、ものすごく綺麗な色だった。ただ、それだけでなく、その空がその風景と結びついて、口では言えない美しさがかもしれない。

されていた。

僕は、その輝くばかりの景色に飛び込もうとしたが、それを踏^{ふみ}つた。何か、その美しさを汚してしまふような気がしたからだ。

下へ降りるのを諦めると、自分の座席に戻り、窓からその景色を眺めた。本当にそれは心が洗われるような景色だった。が、僕の心の傷は何故か癒^いされなかった。確かに心の中には、素晴らしい景色を見た感動が渦巻いていたが、心の傷——今回の旅の原因は、その感動に巻き込まれることなくちゃんと存在していた。

このとき、僕は気付いた。

心の中にある物はすべて、それが良いものであれ、悪いものであれ、どんな事があっても消すことは出来ないのではないか。そうすると、いやな事を忘れる為に旅行に出るというのは間違っていて、現実から逃げ出す事だったんだ。本当にしなければいけなかった事は、いやな事、良かった事、いやそれだけでなく、いままで自分が経験してきた事すべてを土台にして、これからの人生を力強く生きる事だったんだ。

そのとき、列車がガタンという音と共にゆっくり動きだし、外の素晴らしい景色が後へ移動^{うつ}した。たぶん昨夜、老人が見せようと言ったのはこの景色のことだったんだらう。そして僕に、今のことを教えようとしたに違いない。

どうもありがとう。これからしなくてはならない事を教えてくれて。こう言う又何だか、あの老人の返事が聞こえそうな気がした。

いやいや。そんなお礼なんかいいんじゃないよ。わしは学生さんの手助けさえ出来たら、それでいいんじゃない。これからも、苦しい事、つらい事があるだらうが、一生懸命生きるんじゃない。世の中、いやな事

だけでなく楽しい事もあるんじゃないかな。それじゃ、学生さん。お気をつけて……。

列車はもう、あの素晴らしい景色の中ではなく、田んぼの中を走っていた。

ありがとう。そちらこそ気をつけて。

汽笛の音が、繰り返し繰り返し、いつまでも聞こえていた。

The Blazing Red at Sundown

三年八組 Dodo

今日は日曜日だ。ずいぶんためていたレポートをやっと整理し終えて時計を見た。四時三十二分。部屋の掃除をしてもよかったが、なんとなくそうする気にはなれなかった。

部屋のすみにおしやられたスケッチブックの山が目がいった。私は大学にはいつから趣味と実益とを兼ねて雑誌や同人誌にイラストをだしていたので、三年間にかきためた絵はかなりの数になっていた。そういえば、四回生になってから一度も開いてなかったなあ。そう考えると急にまた絵が描きたくなって、ひきだしから鉛筆とカッターをとり出してけずり始める。なにを描こうか。そうだ、あの公園の木。名前は知らないけれども、ちょうど今頃の夕日の金色の光でみると最高にきれいな、あの木がいい。けずり上がった鉛筆とパステルを十色ばかりにスケッチブックをかかえてでかける。公園は歩いて十分位のところにあるのだ。

着いてみると、どうしたわけなのだろう。あの木は切られてしまっていて、切り株がほんの少し見えているだけだった。あんなきれ

いな木をどうして切っちゃうんだろう。まあ切られてしまったものは仕方ないし、せっかく来たんだからその辺でも描こうか。そう思っ
て鉛筆を持ちましたけれど、さっぱり線が生きてこなかった。描くのはやめにして、公園の中を歩いてみることにする。

向こうから子供がかけて来た。うしろにいる母親を振り返りながら走る足もとが危なげだった。あんな走り方してちゃころんじゃうよ。――果たして子供はころび、母親があわててかけ寄って行く。母親は子供に何かいい、手を引いて急ぎ足でいってしまった。

私も小さい頃はよくころんでひざをすりむいていたなあ。最近はずりやひざがつけずに鼻をすりむく子がいるそうだけれど、自分の子供ができて、そんな子になったらやっぱりショックだろうな。

たわいないことを考えながら、ブランコの前にやって来た。すぐ横に砂場があって、小さな子供が五、六人遊んでいる。夕日の方を向いてブランコに座り、ゆっくりこいでいく。揺れるたびに顔にひんやりとした風があたり、金属のきしむ音が予想外に大きく響く。

きいい、きいい、きいい……

なつかしい音に私は、ブランコの揺れとともに時間の流れの間を行ったり来たりしているかのような錯覚にとらわれた。小さな頃の記憶と今の私とが交互に現れる。私は小さな子供になり、また大学生になる。ああ、昔は、昔は私の夢はどんなだったんだろう。そして今は、今の私の夢はなんなんだろう。

もう秋も深まって来たというのに、私はまだ進路を決めていなかった。一応、進学希望をだしてはいたが、研究したいものがあるわけでもなかった。就職するならするで、もう内定してもおかしくない時期だったが、企業に雇われるのが何となくイヤだった。お金

が欲しくないわけではなかったし、大学で学んだことを生かせる職業に就くのが当然であり、だれもが私がそうすると信じているだろう。でも、私がしたいのは……

そうだ、私がしたいのは絵を描いて生活することだ。心の中で渦巻いていて、大声で叫んでしまいたいけれどもできない、何といていいかわからない、そんな感情を、まっ白なボードの上に描けたら、それを誰かがわかってくれて、お金を払うに値するものだと思えてくれるなら、そうして生活していけるなら、それはどんなに素晴らしいことだろう。けれど、私には自信がなかった。認められずに消えていくのがこわかった。そして何も選ぶことができずにこうしているのだ。

いつの間にか遊んでいた子供たちの姿が消えていた。空を見るともう夕日が沈みかけていた。雲がかった西の空は、炭の燃えさしをかきおこしたようだ。もう少し上に目をやると、まだ青い色の明るい空に赤や金色の雲が広がって、それ自体が輝きであるかのように光を放っていた。そういえば、この半年間、こうしてゆっくり夕日を眺めることもなかった。



確かに、私は今まで自分で自分の道を選んできた。絵を描くことより、研究室の壁に囲まれて実験に明け暮れる生活が自分の性に合っていると信じていたし、大学院に進んで研究者になるつもりだった。毎日家に帰る道が真っ暗でも、その中に自分が一生懸命生きていることの実感を見出せるものと信じていた、絵を描くことを犠牲にし

でも、研究者としての人生にそれだけの喜びがあると思っていた。

でもやっぱり違うのだ。実際に自分がそうした状況におかれてみてわかった。本当は、コンクリートの壁より空が、ヴィヴィドな薬品の色よりやさしい花や木や動物たちの色が、ずっとずっと好きなのに、そんな想いに今まで嘘をついて来たんだ。それも、このまま進んで行けば平穏な生活と地位とか得られるとわかっていたからだ。

久し振りの夕焼け空はどこまでもきれいだ。そして、空のあまりの高さと重さに胸が押しつぶされて、目から涙があふれて来た。もしかしたら、こうして空を見ていられることがしあわせなのかも知れない。それなら、失敗しても何を失うことがあるだろう。今までの努力の少なからぬ部分を棒に振ることになったとしても、それが無駄だったと誰が言えるだろう。正しい道は誰にもわからないもののだから、自分の心に正直に生きるべきなんだ。

もう何も考えることはなかった。夕陽に照らされた頬を涙が伝って行くのがわかった。太陽はこわいくらいのはやさで沈んでゆくのに、私にはこの瞬間が無限に続くかのように思われた。冷たい空気に胸が苦しくなるのがわかっていながら思い切り息を吸いこむと、今まで重くのしかかっていたものがとれて自分が少し大きくなったような気がした。

見知らぬ人が通りかかった。私をみて怪訝そうな顔をしているのが見て取れたけれども、涙をふこうとは思わなかった。ただ、ずっとこの空を見ていたかった。

まこちゃんのバケツ

三年七組 MAKO

「今度の図画の時間で絵具使うんだって。」

まこちゃんは小学一年生の女の子。学校で絵具を使うのは初めてなのです。

「あらそう。じゃあバケツを買ってこなけりゃね。」

お母さんは言いました。絵具セットは買ってあったのですが、それには筆を洗うバケツがついていなかったのです。お母さんは次の日市場でバケツを買ってきてくれました。

いよいよ絵具を使う日がやって来ました。しかし、学校に行ってみると、まこちゃんのバケツだけみんなのと違っているのです。みんなのは黄色い、言わゆる「絵具用」のバケツなのですが、まこちゃんのはピンク色の「砂遊びに使う」バケツだったのです。お母さんはバケツなら何でもいいんだろうと思って、市場のおもちゃ屋さんでこのバケツを買ってきたのです。

さて、図画の時間です。まこちゃんは自分以外にも黄色でないバケツを持っている人はいないかと辺りを見回したのですが、残念なことにはやっぱりみんな黄色いバケツでした。そして図画の時間が終わると、みんなのバケツは教室の後ろに五個ずつくらい重ねて置かれたのですが、まこちゃんのバケツはみんなのよりちょっと小さくて形が違うので、いっしょに重ねられないのです。自分のバケツだけぽつんと離れているのを見ると、まこちゃんは仲間はすれになつたみたいで悲しくなりました。

けどまこちゃんは自分までそのバケツをのけ者にしたらかわいそうだと思って、それを大事に使ってました。ところがそのうちにお母さんが黄色いバケツを買ってきてくれると、そんな事忘れてもうピンクのバケツを使わなくなってしまうました。誰も使ってくれないバケツはほこりをかぶったままずっと教室の隅に置かれてました。そしてある日、まこちゃんが思い出したように教室の隅っこに目をやると、ピンクのバケツは影も形もありませんでした。

「私まで忘れちゃったから、怒ってどっか行っちゃったんだ！」

まこちゃんは心の中でバケツに「ごめんなさい」と言いながら教室中を探したのですが、ピンクのバケツはどこにもありませんでした。まこちゃんは仲間はずれみたいになった時よりも、もっと悲しくなりました。

それから十日ぐらいたった休み時間のことです。まこちゃんはあるバケツのことでまだなんとなく気が晴れないまま、ふと、にわとり小屋の前を通りかかりました。

「あれっ？あれは私のバケツだ！」

見るとまこちゃんのバケツはにわとりのエサ箱になってました。どうしてこんなところにあるのか全然わからないけど、まこちゃんにとってそんなことはどうでもよかったのです。ただバケツが見つかったことが本当に嬉しかったんです。まこちゃんはしばらくの間おいしそうにエサを食べているにわとりを見て、そして言いました。

「そのバケツ、本当は私のなのよ。でも私まで忘れちゃったから怒って教室から出て行っちゃったのよね。ごめんね。でもよかった。今度は私の他にもこんなに友達ができただんだから。」



月日は流れ、まこちゃんが小学校を卒業してからもう何年も経ちました。そしてたまたまピンクのバケツのことを思い出すのですが、今はとてもじゃないけれど、あんな感情は持てないだろうと思うのです。単純であまりにもたわいないけれど、素直で純真な感情。大人になっていくというのは、得るものも多いかわりに、失うものも随分多いんだなあ。幼ない頃の思い出は、こんぺい糖を食べた時みたいに甘酸っぱく、そして懐しくまこちゃんの胸に広がるのでした。

日本を出て認識したこと

二年十一組 片 栗 粉

「大手前の人って、人なつっこくて親切なんだあ。」

帰国して、初めて新しいクラスに紹介された時、こう叫んだのを覚えている。我ながら、なんと感動表現がストレートなこと、今では声に出しては言えない。

編集者の御要望は、十ヶ月間の留学をもとに、カナダについて書いて欲しいとのことだったが、私は、今ここで、「カナダは……だったよ。」と記しても、それは目で見た事の十分の一も表せないと思うので、ここでは、帰国してしばらく経ってから認識したことを書いてみたいと思う。

冒頭部分に戻るが、この一言は、けっしておかしなことではないのに、友達と話していると、「クサイこと言ってる……」ということに

なってしまう。また、例えば、朝礼の時、全校生徒の目の前でまともに転んでしまったら、私なら、さっと立ち上がって、「恥ずかしい」と言いながら走っていってしまうだろう。実は、カナダの同じ学校の大勢の生徒の前で、物音を立てて転んだことがある。勿論、皆から注目を浴び、「恥ずかしい」と思ったのだが、それを見ていた友達に、「What a shame!」と言いつつ、「そんなことを恥ずかしがるなんて、変わっているわね。」と言われた。

さて、それでは、カナダ人はどのような時に「恥」という語を使ったか。滅多に聞けない単語だが、第二次世界大戦後にできた、「日系人収容地」(私の滞在していた町のはずれにあった)を見に行った時、ホストマザーが、「こんなことをしたのは恥だ。彼らには何の罪もないのに。」と言っていたこと、また、フランス系とイギリス系のカナダ人が論争しているTV番組を見て、「合衆国と同じく移民の国でありながら、なぜ我々は合衆国のように閉結することができないのか。恥ずかしいことだ。」と、誰かが呟いているのを聞いたことがある。

以上は、日本人とカナダ人の考え方の是非を言っているのではないが、よく言われる、「日本人は、とかく人目を気にしがち」という言葉に、「日本人」という限定には同意できないが)なるほど、何かを言ったりする時、とりわけ重要でもない事柄を、こんなことと言ったら:思われはしないか。という気持ちが働くものだなあとうなづいてしまう。

留学する前、「思ったことは口に出して言いなさい。」とか、「図々しくふるまいなさい。」と先輩からアドバイスされていた。その時は、漠然としか理解していなかったし、なぜそのようにせねばなら

ないのか追求することもせず、「そうですか、ではそうしましょう。」で済ませていた。しかし、実際、日本人として知らない間に身に付けた癖を、一朝一夕で変えることはできず、留学当初はそれが私の足を引っ張っていたように思える。

私は、やっぱり日本人だから、日本独特の静や、謙譲の美德、人の心を考えながら物事を言ったりするところが、肌合っているし、好きである。日本国内で居る時には、そういう態度を重んじたい。しかし、一日日本を出ると、日本式は通用しないことがわかったのだから、今後、海外に出る時にはパリッと割り切って、フランクになるつもりだ。また、これから国際人として世界を飛び回る人が多くなるだろうと思うが、日本人であることがマイナスにならないように、がんばってはいい。 Good Luck!



君は過ぎ去った愛を忘れられますか？

翼ある者は……

二年九組

空^う
蟬^{せみ}
処^と
女^め

遠い昔

少年は

背中に目にみえない

薄いセルロイドの羽をつけて

広い広い河を旅した

体も心も

ぼろぼろに疲れ果てた時

旅は終わり

薄い羽はいつの間にか消え失せ

少年は

大人の日を迎え

夢見みることを忘れた

それから

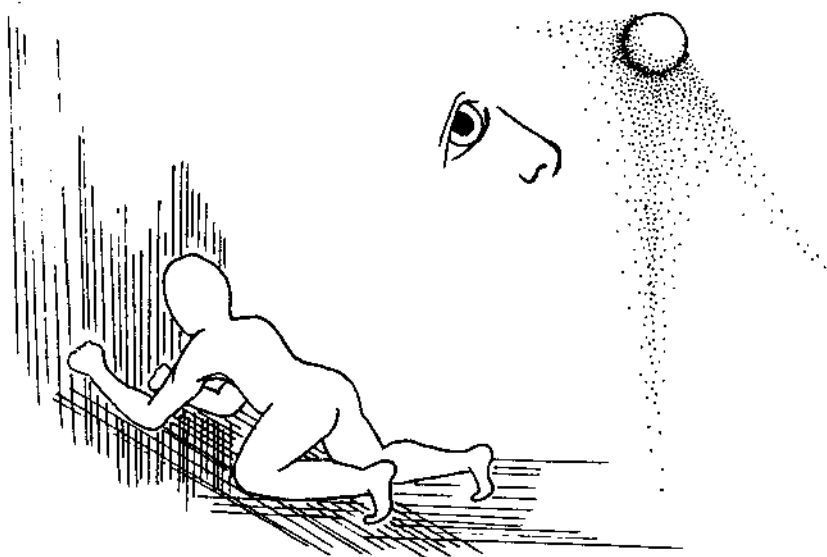
ずっとずっと時がたち

たいそうたいそう年老いて

それこそ臨終の間ぎわになって

その河が「青春」という名前であった事を

ふと思い出した



あなたは優しい人だと思いたいです。

編集長 仲嶋勝喜 & EDITORS

思いのたけをぶついたら、疲れがはじけて世界が飛んだ。——さらば / 自治会

中野 紀夫

編集室は波乱万丈 / 華麗な(?)立ち回りの後に残ったスプリングです。

寺内千佳子

“蠶の塔を組むが如” き心地しけり……

堀内 恵

ありがとうございました。Please read Spring

吉原 美穂

ああ不運 きっと暗い星の下に生まれたんだらうなあ

中野 篤史

ははははくしょん。自治会室でかぜをうつされてしまった。

水野 百合

諸君、悩め、苦しめ、君達の未来は明るいかな、ハハハハ。

切山 裕一

神出鬼没のハムスター 外はまっ暗 自治会室 これが青春なんだろうか…。

里 ひとみ

100号担当の方、対談しましょう。92才…皆生きてたりして。(80年代からのメッセージ)

依岡 伸洋

ご協力下さったみなさんどうもありがとうございます。

田中 蓮子

友達に、ひきずりこまれた編集委員。でも楽しかった。

末松 佳子

SPRINGは皆さんの愛の結晶ですっ！愛してるわ。

華山 嘉子

私はどこ？ ここは自治会本部 スプリングって何？

岡 亮治

我々にとってもっとも大切なもの、それは愛、そして信頼。我々一人一人に様々な想い、考えがあり、努力がある。個性があり色々な面で輝いている。ほぼ同時期に巣立っていく我々、共にはばたこうではないか。

仲嶋 勝喜

14名の努力に大きな拍手を。皆さんも是非、気軽にそしてじっくり読んでみて下さい。

長谷川清一先生

編集顧問

石川 承紀先生
長谷川清一先生

協力

岡野 リカ先生

美術部

漫画研究同好会

河南 真子

後藤 美穂

菅 卓哉

宮田 俊治

松村 緑子

堀場美重子

竹本 有里

嶋津 太輔

菅沼啓一郎

畑中 規男

宮田 泰

たくさん御応募いただきましたこと、ありがとうございます。紙面の都合上応募作のすべてを掲載できなかったことをお詫言ひします。